

第3節 弥生時代終末期の讃岐地域の土器様相について

—下川津B類土器の動向を中心として—

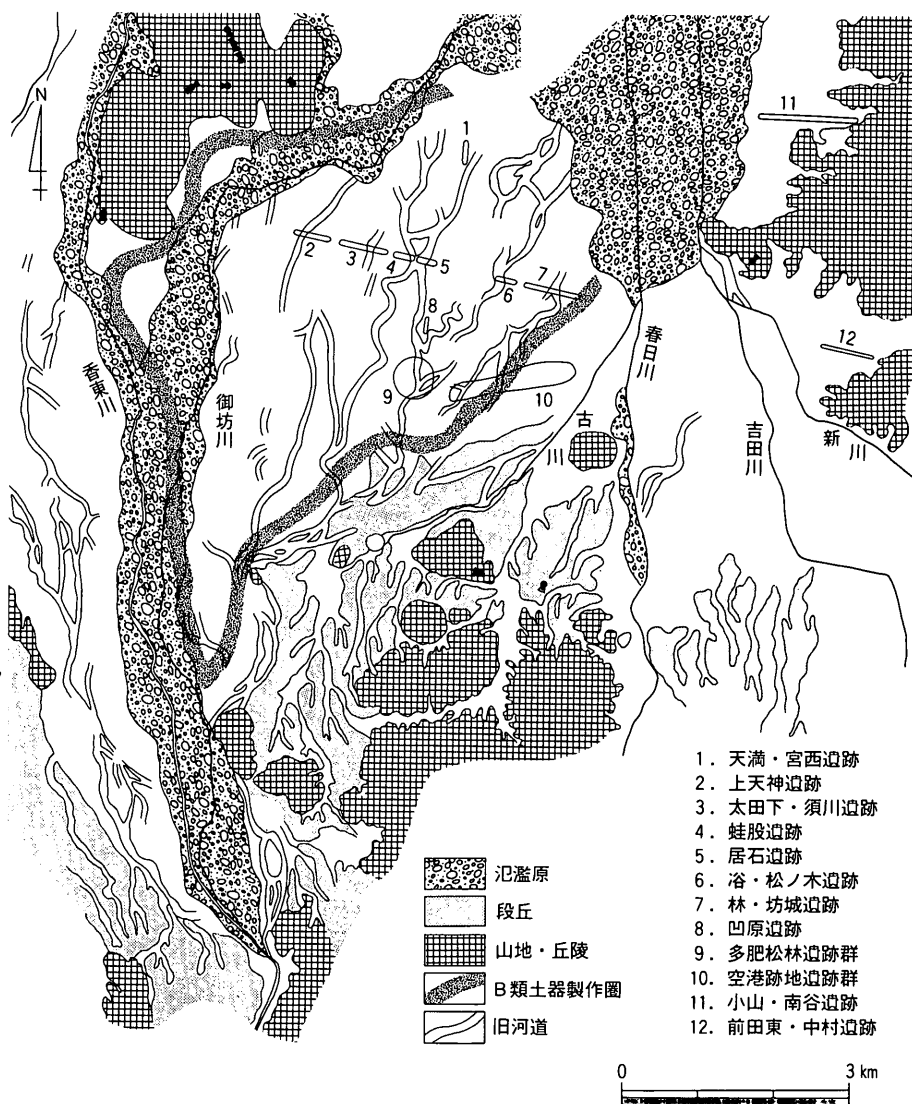
1. はじめに

本県における弥生時代後期の土器様相の特徴の一つに、いわゆる「下川津B類」土器（以下、B類土器と略する）と一般に呼称されている一群の土器がある。この土器群は、角閃石を多量に含む特殊で緻密な胎土と、極めて精巧な作り、後期初頭以降終末期に至るまで伝統的な製作手法を頑なに保持し、東部瀬戸内各地から畿内周辺域にしばしば搬入されるといったことが明らかにされている。一時、「雲母土器」、「四国系土器群」などと称されていた時期もあったが、現在では用語の抱える問題はなお解決されないものの、B類土器という呼称は一般に定着し普及している。

大久保徹也氏は、かつて下川津遺跡の出土遺物の整理を通して、こうした一群の土器を抽出してB類土器という名称を付与し、その編年と製作地などについて推定を試みられた（大久保1990）。特にその製作地については、香川県内各遺跡の出現頻度を集計し、B類土器の分布の中心が高松平野にあり、旧香東川下流域の上天神遺跡を中心とした半径4 km圏内が最も可能性が高いことを示された（大久保1995）。つまり、かつて「讃岐系土器」と称されることもあった土器群だが、その製作地は讃岐内部においても極めて限定され、周辺域へは搬入品としてのみ出土する可能性が高まった。

一方、その間森下友子氏や筆者らによる考察も試みられた。森下氏は、太田下・須川遺跡出土土器について、先の大久保氏の推定と奥田尚氏が行った胎土分析の結果（奥田1995）を踏まえて、B類土器が閃緑岩質岩起源の素地粘土を使用しており、その採取地は高松平野中央部の石清尾山丘陵南端付近に求められる可能性が高いことを指摘し、具体的な素地粘土採取地について提示された（森下友1995）。また筆者は、大久保氏が推測した製作域を、高松平野中央部の旧地形の中に投影することによって、B類土器を製作した集団は、「旧香東川の中小支流を取水源とする幹線水路網を軸に連結された協業関係にある集団」の可能性を提示し、地図上での単なる集団単位の把握から一歩進めて、その集団の性格について指摘を行った（蔵本1997）。B類土器の焼成遺構が未検出の現状にあっては、その製作地論は仮説の域を出るものではない。しかし、B類土器様式の持つ特殊性は、その製

作集団が極めて限定されていた可能性を示唆するものであろうし、その背景として農業生産を機軸とした協業関係にある集団を想定する筆者の考えは、あながち無意味なこととは思われない。この範囲は、かつて都出比呂志氏(都出1989)が、「農業共同体的結合」集団の基礎的単位として想定した「領有権」に概ね相当するものと考えられる。



第280図 高松平野の旧地形とB類土器製作圏

こうした点を踏まえて以下、前稿での筆者の考えを訂正・補強しつつ、弥生時代終末期を中心としたB類土器製作集団の性格や、その周辺部の集団との関係性について素描することとしたい。

さて、B類土器の胎土の注目すべき特徴の一つに、火山ガラスを一切含有しない点あげられる。既に数百点にのぼるB類土器について、筆者は実体顕微鏡下でその胎土の観察を行ってきたが、胎土中に火山ガラスが混入している例は、1点も検出していない。おそらくB類土器は、火山ガラスを全く含まない粘土を使用して製作されたと考えられる。つ

まり、角閃石と黒雲母を多量に含む母岩が風化堆積して生成された1次粘土が使用され、他の粘土や砂礫の混入も一切行われなかった可能性が最も高い。

では、なぜこの集団は、このように特殊な素地粘土に固執したのであろうか。B類土器が他の土器と比して、入念な内面のケズリ調整を多用することによって、器壁が異常なまでに薄く仕上げられる点から、ケズリ調整に同種粘土が適していた可能性もあろう。あるいは、胎土中に含まれる角閃石や黒雲母の光沢に、ある種の価値を認めていたのかもしれないが、推測される要因はいずれも実証性を伴うものではない。しかしながら、前章第2節の清水芳裕氏の分析にもあるように、この集団の同種粘土への執着は明確であり、素地粘土の選択に強い意志を窺うことができる。

一方、中間西井坪遺跡出土のB類以外の土器では、ほぼ9割以上の土器に火山ガラスの混入が確認された。おそらくこれらの土器は、遺跡近辺の沖積平野部の表土下に再堆積した2次粘土層より素地粘土を採取したと考えられる。したがって、始良 Tn 火山灰や鬼界アカホヤ火山灰などに含まれる火山ガラスを、量の多寡さえ問わなければ普遍的に含有する。一定程度の集団単位で、粘土採取地は限定されていたものと推定しうが、土器の製作に適した素地土ならば特に採取地や含有鉱物には固執しなかったようである。この点で、製作する土器に対する観念的な部分での明確な相違を読みとることができよう。

また、B類土器には、他地域からの土器の影響が乏しく、一貫して自らの伝統的な製作手法や形態をその終末に至るまで頑なに固執し、他地域の土器あるいは土器製作集団にはない特殊性を兼備している。同種胎土での他地域系土器の模倣形態の製作は極めて稀であり、胎土や製作技術の特殊性からするB類土器製作集団は、特定集落での集中的でかつ排他的な土器製作の可能性を示唆するものとも考えられる。

なお、多量の角閃石・黒雲母を含有し、火山ガラスを全く含まない特徴的な胎土は、考古学的手法から得られる調整手法や形態的特徴と合わせて、B類土器を識別する上で明確な指標となるものであろう。また、当該期の薄甕の内、いわゆる庄内甕や吉備系甕などには、総じて角閃石の含有が報告されており、角閃石を含む特殊な素地粘土の選択の共通性にある一定の背景を想定することも、あながち無稽なこととは思われない。

2. 搬入量について

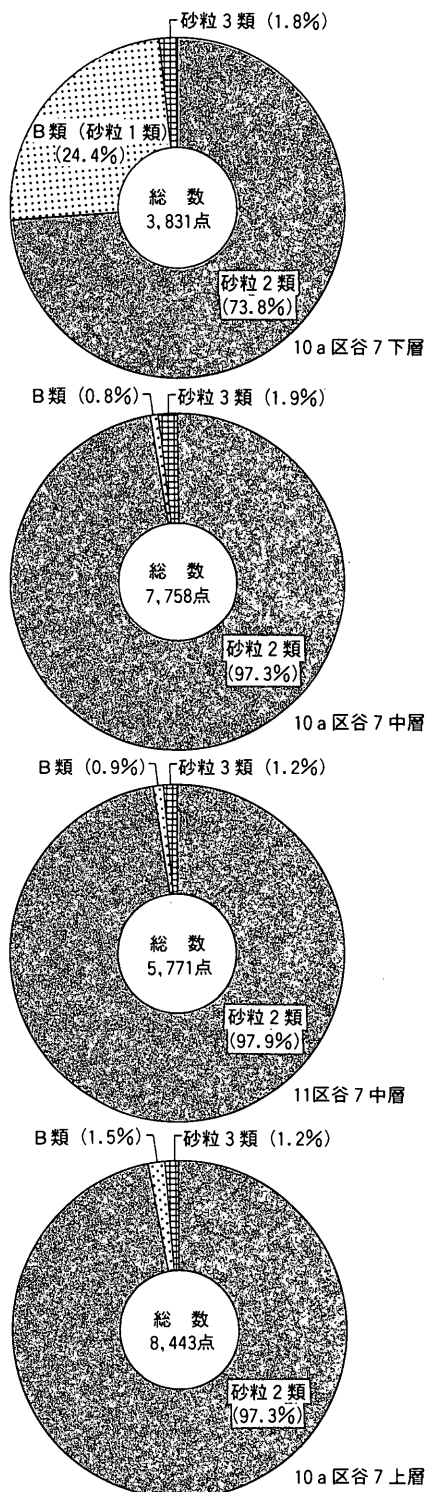
B類土器は、上記したような胎土・形態に特徴を有しており、一定程度その観察に習熟すれば、他の土器と識別することは比較的可能である。従って、各遺跡への搬入の量的問

題については、かなりの確度で議論しうる土器群の一つでもある。そのことは、上記したように、製作地の推定にも大きく貢献した。また、その具体的な検討は、比較的多くの研究者によっても行われている。

例えば、播磨川島遺跡では、山本三郎氏の分析によって1割前後のB類土器搬入量が提示されており（松下1990）、同様に阿波黒谷川郡頭遺跡での菅原康夫氏による分析では、最大13%の搬入が報告されている（菅原1987）。

本遺跡においても、谷7出土土器を中心にB類土器の出現頻度について検討を行った。計測を行ったのは、10a区谷7上層・中層・下層・11区谷7中層の4地点についてである。遺物量が比較的豊富で、層位的に安定して遺物の取り上げが可能であった土器群を特に選択した。分析の方法は、総破片数に占めるB類土器の破片数を百分率で示した。

10a区谷7上層では、総破片数8,443点中B類土器破片数は127点で、出現頻度は僅かに1.50%にとどまる。同様に、10a区谷7中層（総破片数7,758点）では0.80%、11区谷7中層（同5,771点）では0.85%と極めて微量のB類土器が出土しているに過ぎない。一方、10a区谷7下層（同3,831点）では一転して24.41%を示し、上・中層に比してやや高率を占める。両層のB類土器の在り方は極めて対照的であり、中・上層での出土は、むしろ本来下層に包含されていたものが、上位



第281図 中間西井坪遺跡B類土器出現頻度

あるいは別の要因で混入したものである蓋然性が濃厚である。この点は、下層出土のB類土器と、中・上層出土のそれとの間に明確な型式差を認めない点からも首肯しうる。つまり、谷7下層段階（後述するように弥生時代終末期前葉から中葉に併行する）には、全土器量の1/4程度がB類土器で占められていたものが、谷7中層段階以降（同様に古墳時代前期初頭頃に併行する）には、ほぼ搬入が途絶えたと理解してよいだろう。

さて、大久保氏の集計によると、高松平野周縁部の諸遺跡では、新川流域の前田東・中村遺跡の弥生時代後期中葉の資料で37.2%、南谷遺跡の同前葉～中葉の資料で24.9%、春日川上流の竹元遺跡の同中葉～後葉の資料で34%のB類土器の搬入量が報告されている（大久保1995）。遺跡によって資料の絶対量が異なるため、直接に細かな数値を比較することにはあまり意味を有さないであろうが、概ねこの1/4から1/3という出現率が、現状では平野周縁部（B類土器製作圏周縁部）に位置する遺跡群での通時的な搬入の量的傾向として捉えることが可能だろう。

一方、谷7中層段階以降の資料は、平野周辺域では良好な資料に乏しい。以前、平野中央部に位置する空港跡地遺跡で、当該期の遺物について同様の作業を行った（蔵本1997）。その結果、空港跡地遺跡では概ね30%程度の出現率を示し、本遺跡の数値と比して著しく高率であった。しかしながら、空港跡地遺跡では、先行する弥生時代後期後半～終末期の遺構との重複が顕著で、遺物の時期的な問題から、示された数値が当時のオリジナルな様相を反映しているとするには、やや問題点が多いと考えるに至った。古墳時代前期初頭以降のB類土器の消長を考察するためには、製作地周辺におけるより良好なデータの蓄積が必要と思われる。

さて、一方で本遺跡での出現頻度の低下は客観的な事実であり、どのような要因がその背景に宿されているのであろうか。各遺跡でのB類土器の搬入量をみると、弥生時代終末期中葉を境に、その搬入量は器種を問わず軒並み各遺跡で衰退する⁽¹⁾。B類土器製作圏内部の動向は不詳で、現状で捉えられる周辺遺跡での搬入状況から、その製作の消長について具体的に言及できる部分は乏しいが、以下2つの可能性を想定しておきたい。一つは、B類土器そのものの製作が放棄ないしは大きく変質し、周辺部の土器生産と同化した。つまり、特殊な土器様式としてのB類土器様式は消滅した可能性である。もう一つは、B類土器は依然継続して製作されているが、周辺集落においてそれを搬入する吸引力が大きく衰退した。つまり、B類土器が搬出されなくなった可能性である。

製作圏内の集落遺跡の様相は不詳ながら、古墳出土資料にB類土器あるいはその系譜に

位置付けられる資料を若干みることができる。石清尾山古墳群を中心としたいくつかの前期古墳には、B類広口壺の系譜に属する壺形埴輪や類似した胎土を有する円筒埴輪等が散見され、素地粘土の採取を含めたB類土器の技術的系譜が、古墳時代前期を通して維持されている可能性が高い（大久保1996 a）。

上記した事実関係を踏まえるなら、土器そのものの形態や器種組成は大きく変質した可能性を認めるが、B類土器様式は古墳時代前期初頭以降も継続して製作されている可能性が高く、当該時期には自集落内で消費する土器のみを製作する体制へと変化したと考えられる。B類土器が本来有していた機能の大きな部分で、変化が生じたと考えられるのである。その変化の具体像とは、どのようなものであったのであろうか。以下では、取りあえず憶測めいた仮説を提示して、後の考察に備えることとしたい。

結論から述べるならば、前方後円墳の築造に代表される大きな時代の転換点に際して、B類土器が本質的に内在する特殊性（それは弥生時代においては、集団間の関係を確認する上で極めて有効に機能したが）に、他集落への搬出が大きく後退した直接的な要因を求めたい。後述するように、B類土器の搬入形態から推測される集団関係は、日常的な交流を通じて維持された、同じ規範を共有することから生じる内在的で互惠的なものであったと考えられる（そのことは、儀礼的な行為を通して集団間の同族関係の確認を執り行つたとされる埋葬の場に、しばしばB類土器が供献されていること⁽²⁾からも推測される）。しかし、時代の変革は、そうした社会に、内部に格差や序列を伴った広域的な集団関係の再編を要求したのであり、各集団間に極めて高い緊張関係が生起し、集団内の紐帯が強く意識されるようになったと考える。つまり、B類土器を共有することによって維持されていた集団は、他集団からの強い圧力に抗しつつ、自らの領域を可能な限り維持し再生産するため、他集団に対して自己のアイデンティティを主張する必要性に迫られた。こうした時代の変化に対応して、その集団を象徴するアイテムとしてB類土器をシンボル化することには、大きな限界に直面したのであろう。B類土器の諸属性—胎土の特殊性や製作技術の保守性、また高度に洗練された技術体系など—は、B類土器そのものの集団間の普遍化（素材と技術の双方）を大きく阻む障壁として作用したに違いない。B類土器が本質的に内在する限界性とは、前記した特定集落（集団）での集中生産と一元的拡散といった生産体制そのものに集約される。そしてそこでは、新たな集団関係に対応した、各地域単位で独自に製作が可能で、かつ基本的な製作技術や器種組成が共通する条件を満たす、シンボル化された新たな土器群の創出が必要とされたであろう。次節で具体的な検討を行うが、

B類土器の搬出行為の衰退は、こうした土器群の創出と関連した関係にある。なお、前章第2節で検討した胎土中に黒雲母を多量に含有する弥生時代終末期の特異な土器群は、善通寺地域や長尾平野東部地域の集団が、B類土器製作集団へ同化・統合する過程で生じた、ある種試行錯誤的な特殊な現象であったと理解したい。

2. B類土器の器種組成

ここでは、以下に具体的な検討を行う前に、弥生時代終末期を中心としたB類土器の主要器種について整理しておくことにする。一部前節で行った谷7出土遺物の分類と重複する部分があるが、今後のB類土器の分析を見据えてあえて前記分類と整合させずに、B類土器のみの分類名称を付与しておく。

壺

壺は、主に口縁部の形状を基本的な要素として分類を試みる。広口壺2種と細頸壺1種、複合口縁壺1種がみられる。

a. 広口壺A

広口壺Aは、内傾する頸部より強く折れて水平ないしは斜上方に開く口縁部を有する広口壺である。次の広口壺Bと共に、弥生後期初頭以来伝統的な広口壺の系譜上に位置付けられると考える。口径30～40cm程度の大形品と、同30cm以下の中形品の2者があるが、ここでは一括して分類しておく。

口縁部は、直線状ないしはやや外反して開き、端部は内上方へ摘み上げられる。端面は内傾し、強いヨコナデにより凹線状に窪むものが多い。大形品を中心に、口縁端部へ刺突文などの装飾がみられるが、少数に限られる。口縁部内面も、しばしばヨコナデや板ナデにより数条の凹線状の段を認める点は、後記甕・高坏・鉢等の口縁部のそれに通じる。頸部は直線的に内傾し、口縁部との折り返し部分は、強い稜をなす。頸部外面は、ヨコナデないしは縦方向のハケ調整が、内面はヨコナデ調整があまく、指頭圧痕やいわゆる絞り目がしばしば残される。体・底部の形状や調整手法は、後記甕のそれと概ね共通する。一部製作手法に器種を越えた共通性がみられる点は、各器種の製作が個別分散的に行われていたのではなく、同一集落内ないしは工人によってなされていたことを推測させる。

b. 広口壺B

広口壺Bは、直立する頸部より強く折れて水平に開く口縁部を有する。時期的に短頸化

傾向が窺え、これは本形態の祖形がある種長頸壺の系譜上にあることを示唆するものと考ええる。なお、現状では中形品に限られるようである。頸部形態を除いた、体部を中心とした形状は上記広口壺Aと大きな差異を認めない。頸部外面には、稀に数条の篋描並行沈線が施されるが、これは後期初頭以来の広口壺にしばしば認められた数条の凹線文のなごりと考えられるものであり、終末期までにはほぼ廃れてしまうと考えている。

c. 細頸壺

細頸壺は、長く延びた長頸形態の口頸部に、玉葱型の体部が付す。体部の容量は1.3～1.7 l程度と小さく、実用品としてよりもむしろある種祭祀具としての用途の比重が高いと思われる。終末期段階までは、墳墓への供献土器としてしばしば出土する。後期段階では口頸部は直線的にラッパ状に開くが、終末期には内湾する傾向がある。口縁端部は、丸く納めるか鈍く尖る。口頸部外面は縦方向のハケ調整、内面は指頭圧痕を明瞭にとどめる。体部外面は、通常入念な縦ミガキ調整の後体部最大径部を横ミガキ調整を加える。内面は、下半ケズリ調整を施し、上半部は指頭圧痕を顕著にとどめ、また強い絞り目痕を残す。本章第2節で記したように、型成形の可能性を示唆する意見もあるが、本形態への型成形の応用は困難であろう。

d. 複合口縁壺

複合口縁壺は、弥生終末期に西部瀬戸内地方の影響下に本土器様式に取り込まれる。現状では大形品に限定され、しばしば壺棺墓として出土する。口縁上半部は内傾し、外面に数条の凹線文を施す。口縁部外面への凹線文の多用は、西部瀬戸内系の複合口縁壺には存在しない特徴で、本土器様式に取り込まれる過程において、付加された属性である。より後出する形態では、口縁部長は延伸し、外面凹線文は口縁部下端の数条の沈線文へ省略される傾向にある。端部は四角く納める。口縁下半部は頸部より強く折れて、斜め上方へ直線的に開く。頸部は内傾し短い。完形に復元される個体が少ないため、体部の形状は不明な点が多い。現状では、体部は倒卵形ないしは球形に近い形状を呈し、底部は鈍い凸面底を呈するものと思われる。体部外面はタタキ調整の後縦・斜めハケ調整でタタキメを消し去り、内面はケズリ調整もしくはハケ調整の後上半部に指頭圧痕を認める。

甕

甕は、法量によって小形（甕A）・中形（甕B）・大形（甕C）に分類する。

甕Aは容量2.5ℓ以下、甕Bは同3.5～5.0ℓ、甕Cは同11.0～12.0ℓ程度を指標とする。

しかし、容量が計測可能な個体は限られるため、ここでは口径を指標に、甕Aは口径13cm前後、甕Bは同15cm前後、甕Cは同17cm前後をおおよその基準としておく。形態的な相違は、こうした法量差には反映されず相似形を呈する。

形態上の特徴を示せば、口縁部は強く折り返して直線状ないしはやや内湾して開き、端部は僅かに肥厚しつつ上方へ鋭く摘み上げる。内傾する端面は、ヨコナデないし横方向に板ナデ調整され、しばしば鈍い凹線文を認める。口縁部内面も、同様に板ナデによる凹線状の段を認めるが、これは広口壺や高坏、鉢類の口縁部の調整技法と共通する。頸部は、内外面ともヨコナデ調整され、終末期になると内面は強くシャープな稜をなすものと、屈曲部をヨコナデ調整することにより、稜が極めて鈍化し丸みを帯びるものの2者が併存する。口縁部形態は、第292図に示されるようにかなりのバリエーションを認めることができ、時系列上での小異と共に、併存する複数の製作集団の可能性を示唆する。体部は、肩部の張りの強い倒卵形を呈する。後出する形態では、体下半部は球形を指向し、それと共に体部最大径の位置も下降し、全体的に丸味を帯びる。体部外面は、タタキ調整の後、肩部に右下がりのハケ調整、同下半部は逆に右下がりのハケ調整を加えタタキ痕を丁寧に消し、また下半部へは入念な縦方向のミガキ調整を加える。なお、ごく稀に一次調整のタタキ痕が確認される個体もある。内面は、縦ないしは左上がりのケズリ調整を行い、肩部には顕著な指頭圧痕を加える。しばしば、指頭圧痕の以前に肩部内面に横方向の板ナデないしはハケ調整を認めるが、これはケズリ調整時の凹凸をならす目的でなされたものと思われる。また、頸部屈曲の下位に、内面の稜を引き立たせるためのヨコナデ調整が通例施される。以上の調整技法は、ほぼ全個体に共通し、後期初頭以来の同種甕の伝統的製作手法として頑なに墨守される。底部は、体部よりやや突出した安定した平底ないしは凸面底を呈する。外底面には、一定方向のミガキ調整が施され、内面は、体部より連続するケズリ調整の後、外底面へのミガキ調整を行った際、土器内に手を入れて指で支えるなどして付いたと考えられる浅い指頭圧痕を認める。

高坏

高坏は法量差により、中形と小形の2形態に大別する。小形形態は資料的に乏しく、全形を窺える資料は現状では乏しい。従って坏部口径を指標に分類を行う。両形態の口径は、重なり合うことがなく、口径の差と坏部形態の差異も合致し、指標となる条件を満足するものと判断する。なお、基本的な脚部形態は両者間で異ならないと考えられる。前者を高

坏A，後者を高坏Bと仮称する。

a. 高坏A

坏部口径18～28cm前後と、若干の幅を有する。将来的には、中形と大形に細分される可能性もあろうが、ここでは資料的な制約もあり一括して分類しておく。なお、両者の形態上の差は乏しい。坏部中位で屈曲して、上半部は強く外反して開く。口縁端部は、ヨコナデにより窪み、匙面状を呈する。古い形態ではこの匙面は明瞭で、匙面下端が小さな瘤状を呈するものもあるが、新しい形態ではやや不明瞭となるなど、時期により若干のバリエーションを認める。坏下半部は直線状に開き、内面は特徴的な4分割のミガキ調整、外面は横ケズリの後同様に4分割のミガキ調整を加える。脚部は、緩やかに外反してスカート状に開く。内面は基本的に横方向のケズリ調整、外面は縦ミガキ調整を丁寧に施し、内外面端部付近をヨコナデする。端部は四角く納め、より古い形態では端部を鈍く肥厚し、端面はヨコナデにより鈍く窪む。裾部に2孔1対の小円形の透し孔が穿たれ、脚柱部にも3ないし4方向の小円形の透し孔を穿つものもある。

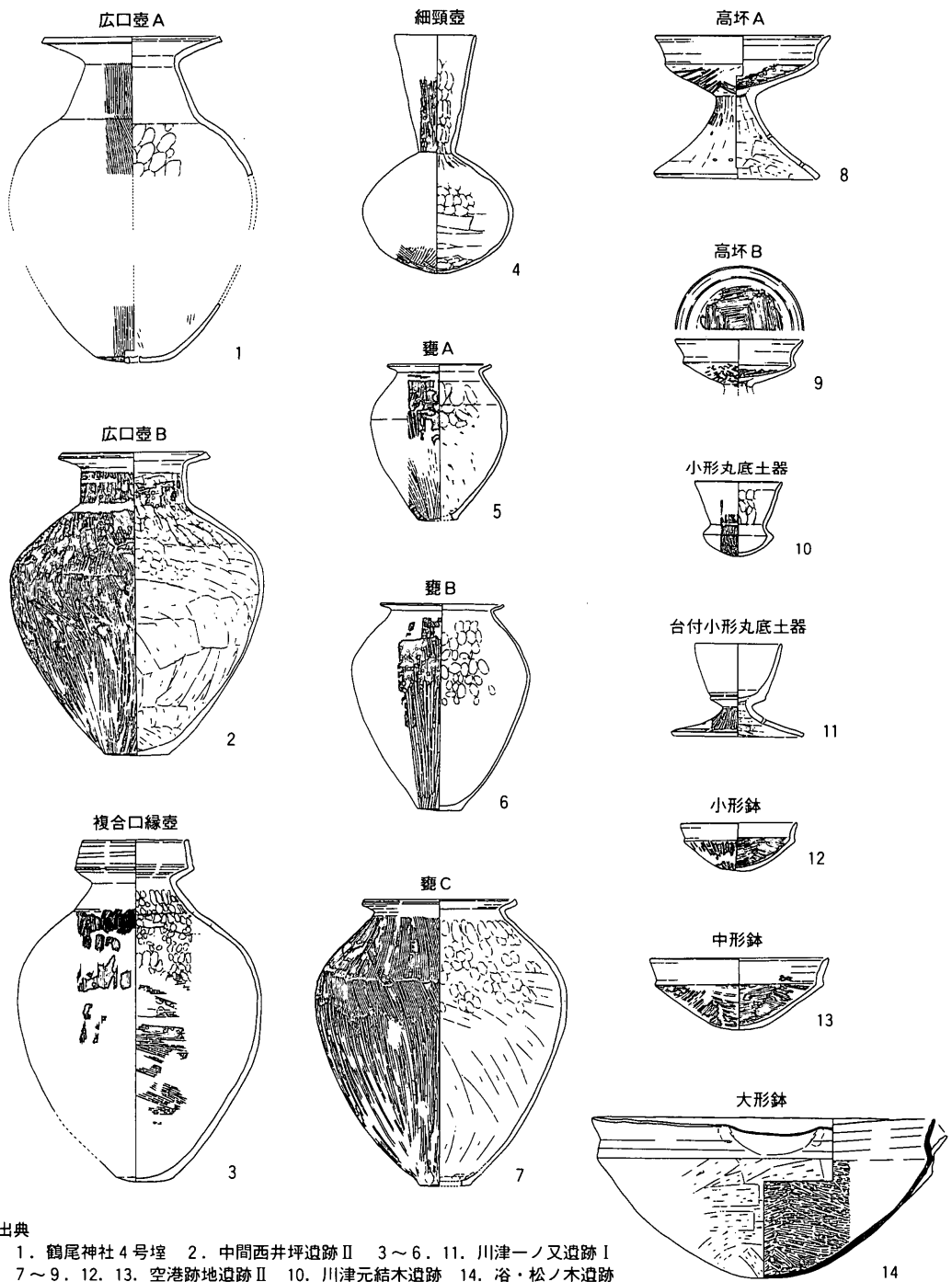
b. 高坏B

基本的な形状は高坏Aと異ならない。坏部口径13～16cmで、坏上半部が直立気味に立ち上がり、外傾度にやや劣る点が高坏Aと異なる。口縁部形態は若干のバリエーションが認められ、内外面の調整手法を含め概ね高坏Aと共通する。脚部形態は良好な資料に乏しく詳細は不明ながら、基本的な形態や調整手法等は高坏Aと大きくは異ならない可能性が高い。本形態は、初現が谷7下層出土資料(211)等より、私案の編年I期と考えられ、後期段階まで遡るかどうかは現状では不明。おそらく高坏Aに系譜を有し、高坏Aを補完する目的のもとA類よりやや遅れて成立するものとする。

鉢

鉢も法量差により、大形、中形、小形の3形態に分類する。3形態とも完形に復元される個体は乏しく、口径を主な指標に分類を行う。なお、小形鉢は類例に乏しく、型式として成立するかどうかは平野中枢部の資料の蓄積を未だ必要とする。

いずれも、基本的な形態が当該期の高坏坏部形状に近似することから、中・小形鉢の機能的側面は高坏のそれと大きくは異ならなかったことを想像させる。しかし、高坏に比すと中・小形鉢の出現頻度は一方的に低く、その機能的側面の大きな部分は高坏が賄っていたと考えられる。一方本地域のB類土器以外の諸土器様式では、高坏に比して中・小型鉢



出典

1. 鶴尾神社 4 号埴 2. 中間西井坪遺跡Ⅱ 3～6. 11. 川津一ノ又遺跡Ⅰ
7～9. 12. 13. 空港跡地遺跡Ⅱ 10. 川津元結木遺跡 14. 浴・松ノ木遺跡

第282図 下川津B類土器主要器種 (1/8, 3のみ1/12)

の出現頻度が卓越し、B類土器とは明確な逆転現象を生じている。これは、小型鉢出現前の弥生時代後期中葉以前の土器組成における高坏の優位性を、B類土器製作集団が終末期に至るまで頑なに保持した結果であり、こうした点からもB類土器様式の特殊性の一端が示されている。

a. 大形鉢

口径30～43cm，器高16～18cm程度のものを分類する。法量的に後掲中・小形鉢との格差は大きい。形態的には、上記したように高坏坏部形状と近似するが、口縁部が直線的に直立ないしは上外方へ開く形態と、鈍く外反して開き内面に数条の鈍い凹線文を施す形態の2者があり、将来的には細分される可能性を有する。なお、調整手法も高坏坏部のそれと共通し、内外面の最終調整に分割ミガキ調整が多用される。また、本形態に限り口縁部の一端に片口を付すものが散見される。底部は丸底ないしは、きわめて不明瞭な平底を呈する。

b. 中形鉢

口径18～23cm，器高6～8cm，容量0.9～1.3ℓ程度のものを分類する。大型鉢同様，形態のみならず調整手法においても，高坏のそれと極めて近似する。底部は丸底ないし鈍い平底を呈し，口縁端部は丸く納める。

c. 小形鉢

口径13cm程度，器高5.5cm，容量0.38ℓの空港跡地遺跡S D e 122出土例のみ。形態的特徴は中形鉢に極似するが，空港跡地遺跡例では，体部外面調整が放射状のミガキ調整に省略されている点が唯一異なる。

小形丸底土器

算盤玉形の体部に，内湾気味に外傾して開く口縁部を付す精製土器。外面にはミガキ調整が多用され，内面はナデ・ヨコナデにより調整される。系譜関係は不明ながら，弥生時代後期後半頃にB類土器の組成に加わるようである。終末期段階では，体部の異常なまでの縮小傾向と，それに反比例して口縁部は大きく発達し，一種定型化した丸底土器が出現する。器形や出土傾向から日常生活の食器としての性格は弱く，やはり祭祀専用の器として製作された可能性は高い。

台付小形丸底土器

上記小形丸底土器の底部に、ハ字形に緩やかに外反して開く脚部を付した形態。丸底土器と基本的な形態は共通するが、体部が著しく扁平となり底部とほぼ同化して、むしろ凸面状の底部外縁に鈍い沈線状の段を付したような退化形態のものもみられる。口縁部は内湾しつつ長く伸び、口径は体部径を凌駕する。脚部は基本的には高坏の脚部形態に準じる。外面は縦ミガキ、内面は横ケズリ調整され、裾部に小円形の穿孔を伴うものも散見される。また、体部と脚部の接合も高坏と同様の充填法が用いられ、技法の共有が窺える。系譜的には、小形丸底土器に遅れて出現するが、赤塚次郎氏の指摘する東海系の影響（赤塚1994）を想定する必然性は乏しく、中部瀬戸内地方で一時流行する壺等への脚部付加のバリエーションのひとつとして理解すべきと考える⁽³⁾。

以上、B類土器の主要器種について分類を行った。複合口縁壺と高坏B、小形丸底土器、台付小形丸底土器の4器種は、B類土器様式成立時にはなく、終末期前後に新たに加わる形態である。B類土器様式も時期によって器種組成に異なりをみせるが、終末期段階には上記器種は全て揃う。他に、製塩土器に同種胎土が用いられている資料を認める（空港跡地遺跡S D e 138上層等）が、報告例が乏しく、周辺地域の様相が不明なため上掲分類案には含めていない。また、底部穿孔土器や器台、西讃地域に普遍的な土製支脚の3器種は、遂にB類土器様式には採用されないまま終焉する。特に底部穿孔土器は、後期初頭の上天神遺跡周辺において同種胎土で製作された資料を認めるが、以後高松平野中枢地域では継続せず、B類土器様式に取り込まれた形跡は認められない。平野中枢域でも底部穿孔土器は普遍的に出土するが、それらは全て搬入土器で賄われる。

B類土器を製作した集団は、後期初頭以来の伝統的な器形を頑なに保持し、その形態や調整手法の変化にさえも消極的であった。また新来の器種をその組成に取り込むに際しても、強い選択意識が働いた可能性が高い。土器胎土における特殊性を持ち出すまでもなく、極めて個性的な集団であったことは疑い得ない。

3. 各地域での搬入偏差

B類土器の搬入量における各地域（遺跡）間の格差については、前項に述べたとおりである。しかしながら、器種単位での搬入の偏りやその模倣形態については、個別遺跡において搬入器種を取り上げることはあっても、地域を広げてより広域的な偏差については、これまで十分な検討が行われたことはなかった。以下では、弥生時代後期末から終末期に

時期を限って、香川県下の各地域のB類土器の器種単位での搬入の偏差について若干の検討を試みる。

A. 三豊平野地域（三豊地域）

大麻山以西に展開する諸平野部を一括して地域圏を設定する。高瀬川・財田川などの中小河川や小丘陵等自然地形によって、将来的にはいくつかの小地域単位に区分する必要性を痛感するが、調査例が僅少なため、ここでは一括して地域圏を設定しておく。前面は燧灘に面しており、備讃瀬戸及び播磨灘に面する後述する善通寺地域以東の各地域とは、海域を異にする。

本地域では、財田川中流域に位置する観音寺市延命遺跡（片桐1990）と一の谷遺跡群（西岡ほか1990）、燧灘に面した海岸付近の丘陵上に位置する仁尾町南草木遺跡（秋山ほか1980）に調査例がある。いずれも弥生終末期中葉から布留式最古相併行期に位置付けられ、遺構内容から良好な一括資料に乏しいが、当該時期の豊富な資料が紹介されている。その内、前2遺跡からB類土器の出土が報告されている。

B類土器は、いずれも中形甕が数点図示されているのみで、他の器種は一切報告されていない。遺跡の経営時期が、B類土器搬出の衰退期に相当することもあるが、その搬入量は全体の遺物量からすれば極少量に限られるようであり、おそらくは百分率で示される程の量ではないだろう。延命、一の谷の2遺跡をもって本地域の状況を代表させるには、やや時期的な偏りや遺跡数の僅少さは拭えない。また、B類土器製作圏からの地理的な距離関係も、後述する諸地域と比較する場合考慮しなければならないだろう。しかし、距離の点では、直線距離でやや遠方に位置する徳島県吉野川下流域の諸遺跡からは、細頸壺や複合口縁壺、高坏等が報告されており、B類土器の搬入形態が必ずしも地図上の空間的な距離関係に反映されない可能性は高い。また、B類土器の模倣形態についても、一の谷遺跡群で中形甕が少量報告されているに過ぎず、さらに胎土の点からいずれも在地産ではなく、搬入土器と考えられることは、B類土器の搬入傾向をある程度反映するものと考えても良い。

つまり、本地域では在地の土器組成の中にB類土器様式を受容しなかった可能性が高く、このことは受容する側において強い選択意識が働いた可能性を示唆する。具体的には、本地域の集団は、高松平野中枢域の集団とは土器様式レベルにおいて疎遠であった可能性が高い。三豊地域の集団がB類土器の搬入を拒絶した点を、まずここでは指摘しておきたい。

B. 丸亀平野西部金倉川下流西岸域（善通寺地域）

丸亀平野西縁，讃岐山脈に源を発する金倉川左岸平野部を地域単位とする。先の三豊地域とは，標高300m以上の丘陵によって隔たれ，自然地形の面から，後述する東部地域とのより頻繁な接触が容易に推測される。

本地域では，丸亀平野中央部以東や三豊地域と異なり，広口壺や複合口縁壺を中心に，口縁部への加飾が顕著な地域色として指摘できる。周辺諸地域と比較した場合，際だった地域色として捉えることが可能であり，上記地域単位設定の妥当性を証するものとも考えられる。その加飾方法には，凹線文や鋸歯文，円形浮文，櫛描波状文，円形刺突文や頸基部への刻み目突帯などがある。丸亀平野中央部以東でみられるこうした加飾の顕著な壺のいくつかは，本地域からの搬入品であることが多い。

彼ノ宗遺跡（笹川1985），稲木遺跡（西岡ほか1989・善通寺市ほか1986），九頭神遺跡（笹川1988・1995），仲村廃寺（笹川1989），金蔵寺下所遺跡（廣瀬1994），永井遺跡（笹川1993）他で当該時期の遺構・遺物が報告されており，海岸部を除いて豊富な資料の蓄積がある。

B類土器は，細頸壺，甕A・B，高坏A・B，中形鉢，小形丸底土器が出土している⁽⁴⁾。いずれの遺跡においても，量的には土器組成の主体を占めるものではなく，おそらく占有率は10%以下程度しか搬入されていないと推測される。しかし，複数器種に跨り，数型式間継続して搬入されており，単なる偶発的な搬入形態ではない点は，先の三豊地域と大きく異なる。

一方，模倣形態には，複合口縁壺（金蔵寺下所），甕A・B・C，広口壺A・B，細頸壺，高坏A，小型丸底土器（以上，稲木・彼ノ宗），台付小型丸底土器（仲村廃寺）等がみられ，器種及び量的にもむしろ搬入土器を圧倒する。この模倣土器の中には，前章第2節で検討した砂粒分類3類に分類される黒雲母を多量に含有した特殊な素地粘土を用いた土器（稲木他）も一定量含まれており，本地域が模倣土器の確実な製作域であることが確認された。

上記より，本地域はB類土器そのものを製作した痕跡は窺えないが，同種土器が複数器種に亘り一定量搬入もしくは模倣され，在地の土器組成に一定程度の影響を与えたことが実証された。こうした土器様相を呈するエリアを＜B類土器共有圏＞と称することとした。こうしたエリア内部では，集落遺跡より出土する土器棺墓にB類土器が使用され，また墳丘墓の供献土器にも同種土器が散見される⁽⁵⁾。土器棺に使用される土器や，供献土

器の種類が、その被葬者の出自系譜や集団間の関係性の表出に関連するとの想定に立てば、こうした事例はB類土器共有圏の性格を追求する上で興味深い視点となる。

また、B類土器の模倣形態には、祖形となるB類土器の形態や調整手法等、型式学的諸属性すべてを満足するものと、一定の模倣は指向するが、形態や調整手法に省略や稚拙さ、あるいは変容が窺えるものの2者がある。前者は、基本的に在地の土器製作技術の系統にはない調整手法などが駆使される例もあり、その習得には一定の時間や経験が必要と考えられる。おそらくはB類土器製作集団に関与した工人によって、各地域の粘土を用いて製作・模倣されたと考えられる土器群である⁽⁶⁾。この場合、素地粘土のみをB類製作圏に搬入し、そこで製作した土器を再び各地域へ搬出したとの想定はやや合理性に欠けること、及び特定器種に偏らない複数器種の模倣形態が製作・使用されていることから、B類土器製作圏からの直接的な工人の移動を想定すべきである。具体的には、B類土器製作圏からの婚姻・移住・派遣等による可能性を想定する。忠実な模倣形態の分布範囲は、当時の通婚圏や頻繁な交流・交易圏を反映していよう。このような工人の移動範囲は、当然B類土器共有圏を大きく逸脱しては生じえない現象と考えられる。

C. 丸亀平野中央部土器川下流西岸域（丸亀地域）

金倉川右岸から土器川左岸下流域の平野部を地域単位とする。東西を河川に画され、北に開けた自己完結的な地域圏が設定される。旧金倉川と旧土器川の中小支流群を取水源とする灌漑用水路網によって連結された地域圏が復元される。

近年の大規模開発によって、龍川五条遺跡（宮崎1996）、龍川四条遺跡（西岡ほか1995）、道下遺跡（宮崎1991）、三条黒島遺跡（森下1997a）、三条番ノ原遺跡（片桐孝1992）、郡家原遺跡（山下ほか1993）、郡家田代遺跡（佐藤ほか1996）等が調査され、良好な一括資料を含む豊富な資料群が提示されている。基本的には先の善通寺地域と土器様相において均質的な内容を有し、善通寺地域での製作の可能性が推測される黒雲母粒を多量に含む特殊な胎土を有する土器の一群が、比較的多量に出土している点が後述する坂出地域との明確な差異として抽出される。

B類土器には、広口壺A、細頸壺、甕B・C、高坏A・B、小形丸底土器が出土しており⁽⁷⁾、先の善通寺地域と同様に鉢類に欠落することが特徴である。また、資料的に比較的まとまった内容を有する郡家原遺跡S D107出土資料でも、同種土器の占有率は数%程度しかなく、量的に土器組成の主体を占めるものではない。しかし、一定量の甕B・複合

口縁壺を中心とした模倣形態も存在し、B類土器共有圏に包括される。

D. 丸亀平野東部大東川下流域（坂出地域）

丸亀平野東部の大東川下流平野部の遺跡を地域単位として設定する。旧大東川の中小支流群を取水源とする、灌漑システムを共有する地域集団を単位設定の根拠とする。

本地域も大規模開発による資料増加が顕著な地域である。下川津（藤好ほか1990）、川津中塚（西岡ほか1994）、川津下樋（片桐1996）、川津二代取（木下1995）、川津一ノ又Ⅲ区（山下1997）、同Ⅳ区（古野1998）、同河川改修区（片桐ほか1997）、川津元結木（片桐孝1992）等で、当該時期の遺構・遺物が検出されており、良好な一括資料も提示されている。

さて、複合口縁壺や支脚形土器によって示される西部瀬戸内系土器様式は、当該時期前記した三豊地域には在地の土器組成に部分的ながらも組み込まれ、より東に向かうにつれて漸移的にその色彩を弱めつつ広く分布する。そして、本地域は同種土器が一定量製作される地域圏の東限を画する⁽⁸⁾。より以東の地域では、同種壺・支脚の報告例は皆無に等しく、確実なものとしては僅かに高松市空港跡地遺跡S D e 115より、弥生時代終末期の角形支脚1点が報告されているのみである（蔵本1997）。

B類土器は、広口壺A類と大・小形鉢を除いた代表的なほぼ全ての器種が出土している⁽⁹⁾。子細にみれば、甕Bと高坏A類は安定して搬入されており、高松平野では僅少な小形丸底土器と台付小形丸底土器も一定程度搬入されているが、細頸壺を除く壺・鉢類の搬入率はやや低い点に特徴を認める。また、模倣形態についても複合口縁壺を除いた各器種が確認される。製作地である高松平野中枢部を除けば、現状でこうした搬入・模倣傾向をみる地域は他に例がない。報告資料数が他地域と比較して多く、直接地域間を比較することは現状ではあまり意味を持たないだろうが、後述する中枢部に隣接した高松平野東・西縁部でさえ、小形丸底土器や台付小形丸底土器の一定量の搬入は見込めないことからすれば、やはり特殊な地域として捉えることができよう。

当時本地域は、北西の季節風を遮る丘陵（青ノ山）を擁した入江状を呈する地形環境にあったと想像され、海浜部に良好な港の存在が推測される点は、その背景を説明する上で看過できない。下川津遺跡での小型仿製鏡や舶載鏡？、鉄鏃、鉞、鎌、板状鉄斧等、川津中塚遺跡の舶載鏡？や鉄鏃、ガラス玉等を示されるように、本地域の諸遺跡からは、他地域と比較して青銅器類に代表される非自給物資の出土が頻出する傾向にある。こうした点

も、物資流通の拠点として、坂出地域の有する地理的優位性を示唆する。また、川津一ノ又遺跡（古野1998）からは、讃岐諸地域にあつては上天神遺跡周辺域以外では出土例に皆無な「把手付広片口皿」が出土しており⁽¹⁰⁾、さらに他遺跡にはない多量の朱付着土器をみる点は、坂出地域と高松平野中枢部との密接な関係を想定させるに充分であろう。

E. 高松平野西縁本津川下流域（高松西部地域）

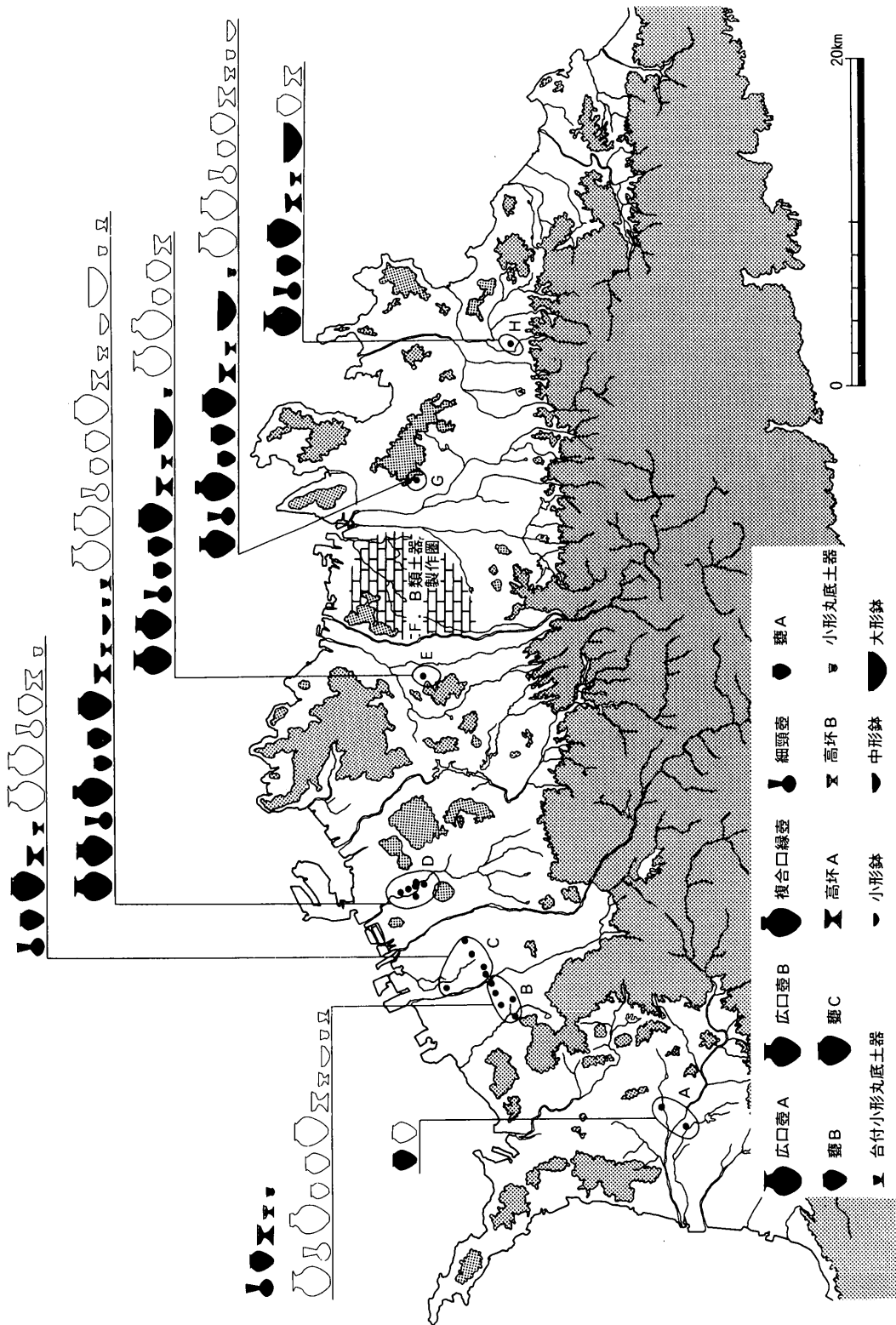
高松平野西縁の香東川下流域左岸、本津川下流域平野部と本津川の支流である古川流域の平野部を地域単位とする。灌漑水利系統を重視すれば、さらに3～4の小地域単位に区分することが可能だが、ここでは調査例が少ないため、一括して地域単位を設定する。後述するB類土器製作圏の高松中枢域に西接する。本地域では、中間西井坪遺跡が唯一内容が判明しているが、他に高松市西打遺跡（北山ほか1998）より当該時期の遺構・遺物が出土しているようである。

B類土器は、本文中に記しているため細かな点は省略する。広口壺A・B、細頸壺、甕A・B・C、高坏A・B、小形丸底土器が出土しており、複合口縁壺、台付小型丸底土器、小・中形鉢を欠落する。大形鉢は小片のため、高坏坏部との判別は困難で、搬入の有無については不詳である。また、模倣形態として広口壺A、複合口縁壺、甕A・B、高坏Aが出土している。

F. 高松平野中央香東川下流域（高松中枢地域）

後期初頭から終末期にかけて、B類型胎土の土器群を製作・消費したエリアである。上天神遺跡（大久保ほか1995）、太田下・須川遺跡（北山ほか1995）、林・坊城遺跡（宮崎1993）、空港跡地遺跡（西岡1996・蔵本1997）、浴・松ノ木遺跡（山元ほか1994a）、井出東I遺跡（山元ほか1995a）、浴・長池II遺跡（山元ほか1994b）、居石遺跡（山元ほか1995c）、蛙股遺跡（山元ほか1995b）、日暮・松林遺跡（山本英ほか1997）より、当該時期の遺構・遺物が報告されている。調査された遺跡数は多いが、一部の遺跡を除いて良好な一括資料に乏しく、実体はやや不明瞭である。

B類土器は、台付丸底土器を除くTKでの器種が出土している。特に、他地域では搬入例の乏しい広口壺や鉢類も一定量出土しており、日常容器として普遍化していたものと考えられる。また日暮・松林遺跡（山本ほか1997）では、3点の小形丸底土器が報告されているが、いずれもB類土器ではなく、内2点は黒雲母粒を多量に含む前章に詳述した砂粒



第283図 下川津B類土器撒入偏差 (黒塗りはB類土器を、白抜きはその模倣形態を示す)

分類3類土器である。こうした諸点は、より類例の蓄積を必要とするが、台付丸底土器の欠落と共に、小型丸底土器各種が他地域への搬出専用の器種として製作された可能性を示唆するものとも受け取れ興味深い。

模倣形態では、太田下・須川遺跡や六条・上所遺跡より中形甕が少量出土しており、搬入土器と考えられる。

G. 高松平野東縁春日川下流域（高松東部地域）

高松平野東縁部の新川右岸平野部を地域区分とする。東に丘陵を擁し、四周を自然地形に遮断された極めて閉鎖的な地域が設定される。東部の丘陵より舌状に張り出す小尾根によって、いくつかの灌漑単位に分割される。

本地域では、前田東・中村遺跡（森ほか1995）が唯一資料化されているのみで制約は大きい。他に小山・南谷遺跡（片桐ほか1994）においても、当該時期の資料が出土しているようである。

前田東中村遺跡からは、後期初頭以降布留式新相併行期の遺構・遺物が出土しているが、谷部流路や溝からの遺物が大半を占め、細かな時期を特定することはやや困難である。B類土器は、広口壺B、細頸壺、複合口縁壺、甕A・B・C、高坏A・B、大型鉢、小形丸底土器が出土している⁽¹¹⁾。甕では、甕Bが主体で、甕A・Cが少量に限られる。壺では、明確な広口壺Aを欠落する。壺の搬入量は限られ、壺形態に占める割合は微量でしかない。高坏では、高坏Aが普遍的に出土しているのに対して、高坏Bは少数に限られる。小形丸底土器は、10点が図示されており、内1点のみB類土器の可能性が高い。台付小形丸底土器は出土しておらず、同形態の出土傾向は製作圏内部での様相に近似する。

また、模倣土器には、広口壺A・B、細頸壺、甕A・B・C、高坏A・B、中形鉢がみられる。胎土の点から遺跡周辺で製作されたと考えられる模倣土器の他、前章第2節で詳述した砂粒分類3類に分類される土器群の模倣形態も一定量出土している。なお、模倣形態を含めたB類系高坏は、本遺跡の高坏の主体を占める。

H. 長尾平野奥部鴨部・津田川中流域（長尾地域）

高松平野東縁より東に連続する平野部を地域単位として括る。長尾低地・寒川台地と呼ばれる地形単位に相当する。津田川と鴨部川、及び両河川に合流するいくつかの支流群によって、複数の灌漑水系単位に区分されるが、志度町鴨部南谷遺跡（國木1990）と寒川町

森広遺跡（山本ほか1997）の2遺跡が資料化されているのみで、制約が大きく細かな様相については明らかではない。

鴨部南谷遺跡では、遺跡の経営期間の主体がⅣ期以降にあたるため、B類土器の報告例は皆無である。

森広遺跡では、断続的ながら弥生後期後半からⅣ期にかけての遺構・遺物が出土している。掲載された遺物量が乏しく、他地域と直接的に比較するには制約が大きい。各器種共B類土器が主体とならないことは確実なようである。

B類土器は、大形広口壺、細頸壺？、甕B・C（529）、高坏A・B、大形鉢が出土している⁽¹²⁾。点数は乏しいが、複数器種が認められる点は重視したい。また、口頸部を欠くため器種は不詳ながら、B類大形壺が土器棺墓に使用されている。また、B類模倣土器には、甕Bと高坏が認められる。

上記した各地域以外にも、志度湾に面した原中村遺跡（西村ほか1997）では、B類土器は広口壺A、細頸壺、甕B・C、高坏A、中形鉢等が搬入されており、模倣形態は不詳ながらB類土器共有圏に包括されるものとする。

以上、各地域の様相を詳細に検討した結果、三豊地域と善通寺地域以東の各地域で、B類土器の搬入形態に大きな格差の存在することが明らかとなった。前者の地域では、B類土器の搬入は極めて限られ、甕Bが少量偶発的に搬入されるのみと考えられる。また、少量ながらも善通寺地域の胎土の特徴を有する搬入土器（砂粒分類3類土器）もみられることから、B類土器は隣接する善通寺地域を経由して2次的に搬入された可能性が高い。このことは、善通寺地域において西部瀬戸内系土器群が、一定量出土することと表裏の関係にあると考える。

一方、善通寺以東の各地域では、B類土器は地域によって搬入量や器種にやや偏りを有しながらも、複数の器種が一定量搬入され、さらに模倣土器も製作されている。また、高坏におけるB類土器への傾斜等からも、B類土器の搬入が各地域の土器組成に一定の影響を及ぼしたことが推測された。さらに、僅かながら土器棺墓にB類土器の使用が確認される。つまり、善通寺以東の各地域は、B類土器を積極的に受容したエリアとして位置付けることができ、そのようなエリアをB類土器共有圏と称することとした。そして、共有圏内部の諸地域においては、B類土器製作圏との間の直接的な接触が、恒常的に保たれていたと考えられる。

B類土器共有圏の成立について、その具体的プロセスを復元することは、弥生後期段階の資料が乏しく現状では困難である。以下では、土器資料以外の資料を援用しつつ、共有圏成立の背景について考察を試みよう。

4. 竪穴住居の様相

本県では、現在までに優に300棟を越える弥生後期から古墳前期の竪穴住居跡が検出されている。これら竪穴住居については、個別の遺跡での評価を別にすれば、これまでに総合的な検討はなされておらず、円形住居に方形の張り出しを設ける例が、讃岐・阿波・播磨・摂津西部に分布していることが僅かに指摘され、これら地域間に強い親縁関係が想定されているに過ぎない（宇垣1995）。以下では、やや視点を変えて、竪穴住居の平面形態を軸に、弥生後期から古墳前期初頭頃の住居形態について検討を行い、上記B類土器の搬入偏差の背景を考察する一助としよう。

検討作業を行う前に、まず当該期の竪穴住居の集成を試みた（第24～26表）。集成表中には、正式報告書が刊行され位置付けが確定されているものを中心に、また損壊や未調査部分が少なく、内容が一定程度判明しているものを意図的に選択して取り上げた。記載内容は、報告書に掲載された平・断面図を元に検討を行ったため、一部報告書とは評価を違える部分もある。また、方形住居については、短辺長を長辺長で除した値が0.9以上のものを方形（a類）、以下のものを長方形（b類）とした。

そして、以上の検討を踏まえた上で、平面形態と床面積を基準に形態分類を試みた。つまり、床面積 20m^2 以下を小型、同 $20\sim 40\text{m}^2$ を中型、 40m^2 以上を大型とし、平面形より小型方形をⅠ類、中型方形をⅡ類、大型方形をⅢ類、小型円形をⅣ類、中型円形をⅤ類、大型円形をⅥ類、多角形をⅦ類の7分類を行った（第284～287図）。多角形住居については、平面形（五角形・六角形等）や規模（中・大型）によってより細分することは可能だが、検出例が乏しく、現状では細分類に意味を見出しえないため行わない。なお、多角形住居については、 20m^2 以下の小型のものは現状では皆無である。

さて、本地域においては、中期以来の伝統的な平面円形を呈する住居群の中で、後期以降には方形基調の住居が占める比重が徐々に大きくなるようである。方形住居は、中期中葉頃には既に本地域に出現した可能性が高く、確実な検出例は乏しいが、三木町西浦谷遺跡（石井1988）、高松市浴・長池Ⅱ遺跡SH01（山元ほか1994b）、大野原町平岡遺跡群（片桐節1992）等においてその可能性のあるものが検出されている。

一般に発掘調査によって検出された竪穴住居の平面形態の相違は、おそらく上屋構造の相違を反映するものと考えて大過ないものと思われる。基本となる建築構造は共通しても、その相違は建築技術や用途・機能、あるいはそこに居住する集団の慣習や生活意識の差異をも包括する可能性を有する。以下に述べる住居形態の相違を軸にした集団関係の検討は、そうした前提の上に成り立っている。

まず、各地域の様相を整理することからはじめよう。

三豊地域では、資料数に乏しく、一の谷遺跡群（西岡ほか1990）と南草木遺跡（秋山ほか1980）の2遺跡・30例のみが報告されており、その内資料化されたのは27例に過ぎない。

後期前葉の資料は乏しく、一の谷遺跡群で3方向に張り出しが付す円形住居1例（SB306）が検出されているのみである。出土した土器の内容は、中部瀬戸内の色彩が強く、土器様相からみる限り中東讃地域との差異は乏しい。

終末期以降の資料数は増加するが、細かな時間差での住居形態の変化を辿ることは、現状ではやはり困難である。限られた資料から、少なくとも終末期と古墳前期初頭頃の住居間に大きなヒアタスを認めることはできない。つまり、終末期以降には張り出しを有する住居はみられず、平面形も中・小型住居では方形を基調とし、大型住居を中心に少数円形ないしは多角形住居が存在する傾向を認めることができる。こうした状況が三豊地域に普遍化できるかどうかは不安だが、終末期以降の張り出しを有する住居比率の減少と、方形小・中型住居の多数化傾向に大きな特徴が認められ、後述する他地域と比較して独自の住居形態における小地域色と捉えておきたい。

次に、丸亀平野西部地域（善通寺・丸亀地域）では、8遺跡10地点において当該時期の住居遺構が検出されており、資料化された住居数も65例に達する。三豊地域に比して資料数は倍増するが、時期的な偏りは抗しがたい。

後期前半段階の住居は、円形2例と方形1例の計3例がある。資料数は僅少なが、資料化されえなかった検出例なども検討し、円形優位の可能性を指摘しておきたい。なお、張り出部の有無については、明確ではない。次に後期後半以降の住居については、先の三豊地域とは異なり方形住居の占める比率は低く、三豊地域84%に対し本地域では約63%に低下する。しかも、大型方形住居の検出例はなく、本地域で方形住居は小・中型に限られるのが大きな特徴である。また、小・中型円形住居も一定数存在し、円形住居は三豊地域のように限られた存在ではなくより普遍的な様相が強い。さらに、張り出しを有する住居も10

棟が確認されており、確実にその存否が判明する住居の比率は約30%に達する。つまり、3棟に1棟は張り出しを有する可能性が高く、またその平面形も円形ないし多角形に限られることはなく、方形住居の一隅に張り出しを付設する例も散見される。

しかし、時期的な変遷を細かく検討すれば、弥生後期後半段階では、方形住居6例、円形住居9例、多角形住居2例となり、方形住居の占有率は僅か約35%程度と低率だが、終末期段階では円・多角形住居12例に対し、方形住居は30例と急増し、その占有率も約71%に達する。以降、古墳時代前期初頭段階の2例、同後半段階の1例が検出されているが、いずれも方形住居であり、資料数は僅少ながら円形住居の検出例は皆無となる。なお、小型方形住居では2本主柱、中形方形住居では4本主柱が支配的であり、住居構造においては三豊地域との間に根本的な相違は抽出できない。張出部も終末期段階までは確実に伴うが、古墳時代前期初頭の住居には認められない。各時期の資料数が僅少で不均等なため、各々の時期を直接に比較し、また古墳時代前期以降における張出部の欠落を大きく評価することも困難だが、弥生時代後期後半以降における方形住居の卓越化状況は概ね看取することができ、古墳時代前期初頭段階に一つの画期を設定することも可能かとも思える。

上記した状況は、丸亀平野東部（大東川下流）地域でも概ね共通する。本地域では3遺跡で当該期の住居遺構が検出されており、54例が資料化された。しかし、時期的な偏りは本地域でも共通し、後期前半段階の明確な資料は欠落する。

また、後期後半段階では、23例の住居が報告され、その中で方形住居は僅か7例で占有率も約30%に止まる。しかし終末期段階には、28例の報告例のうち方形住居は18例で約64%に急増し、古墳時代前期初頭以降には円形住居の検出例はなく、住居平面プランの推移は概ね丸亀平野西部地域と歩調を等しくする。しかし、丸亀平野西部地域が終末期には小・中形方形住居を主体とするのに対して、本地域では中型方形住居が卓越し、また少数ながら丸亀平野西部地域では欠落していた大型方形住居も検出されており、若干の地域的差異が抽出される。こうした小地域色は円形住居にも認められ、後期後半段階では中・大型住居の卓越と、終末期段階での多角形住居の衰退に、丸亀平野西部域と比較した場合の本地域の特徴がみられる。なお、張出部を付設する住居は、後期後半段階で6棟、終末期段階でも6棟が検出され、存否率はそれぞれ約33%と約26%となり、後期後半以降緩やかな衰退化の可能性が窺える。さらに、古墳時代前期初頭以降の住居には認められず、古墳時代前期には張出部の消滅として顕在化する可能性が高い。とすれば、円形ないしは多角形住居に普遍的であった張出部も、終末期段階にはむしろ中型以上の方形住居に選択的に

付設される点も、住居平面プランの推移と共に、張出部付設の末期的な状況と捉えることも可能であろう。

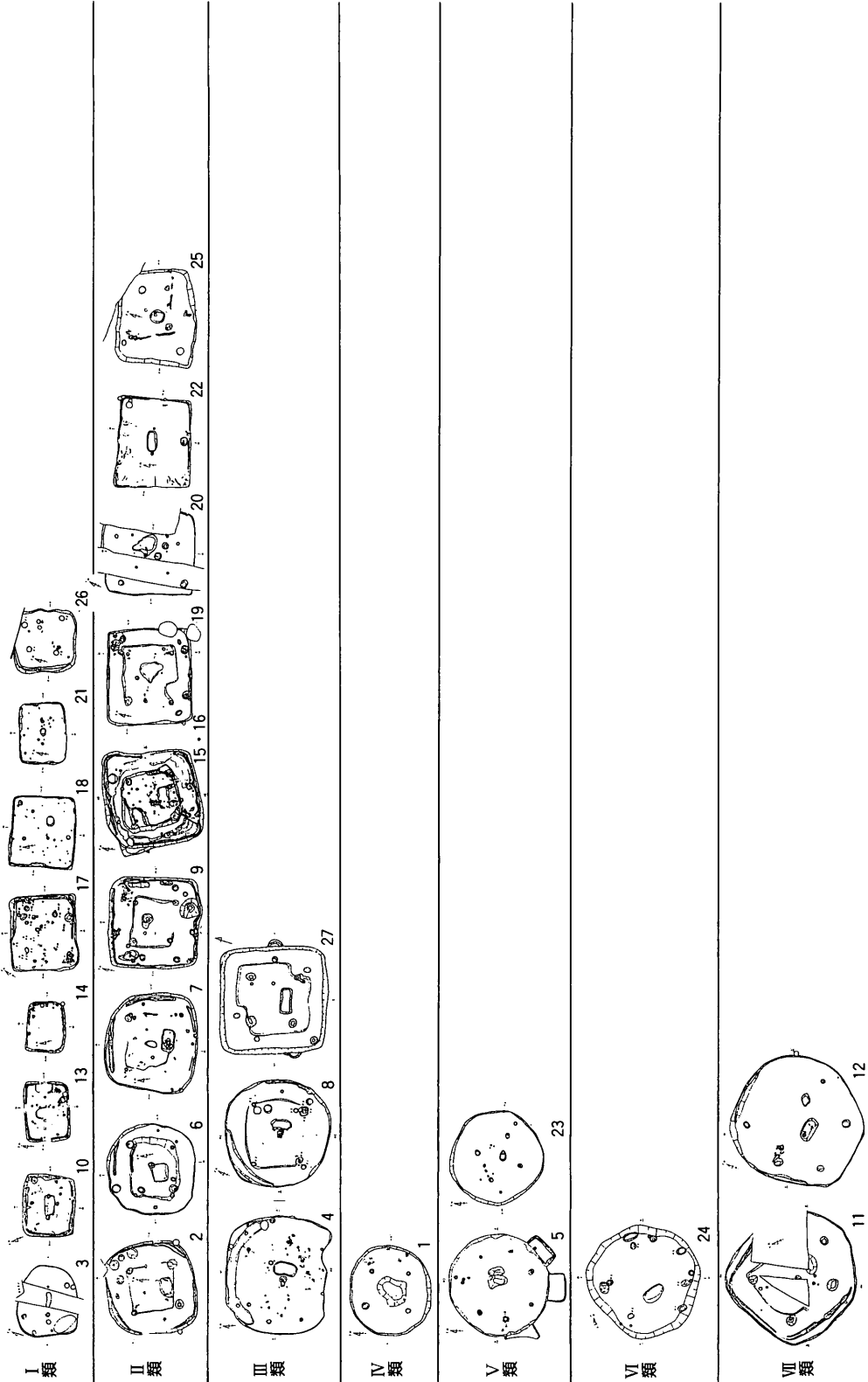
最後に、高松平野以東地域では、調査された遺跡数は多いが、報告書が刊行された良好な資料に乏しく、資料化された住居数は僅かに20棟に過ぎない。概要報告のみの西打遺跡や、東讃鴨部川下流域の鴨部南谷遺跡の2遺跡を含めて検討するが、資料数の僅少さは解消できない。

後期前半段階の住居は、円形住居2棟と長方形が1棟検出されているのみである。資料数が僅少なため全体の傾向を推量することは困難だが、上天神遺跡での削平された住居の様相などからも円形優位の可能性は高い。後期後半以降の資料は16例と乏しく、細かな時期的推移を窺うことは困難なため、一括して扱わざるを得ない。本地域でも後期後半以降、数字上は方形住居の占有率が約75%に達し、大半は終末期段階の資料であることから、当該期には上記2地域と同様方形住居の卓越化が指摘される。しかし、資料数の偏りから、直接上記地域と比較することは困難であり、方形住居の卓越化以上にこの数値に大きな意味を見出すことはできない。一方で、空港跡地遺跡では終末期から古墳時代前期初頭の円及び多角形住居が数棟検出されており、当該期での住居平面プランの多様性が指摘される。また、張出部を付設する古墳時代前期初頭に下る可能性のある円形住居も検出されており、他地域と比較して張出部の伝統が意外に根強く残存する可能性も指摘される。

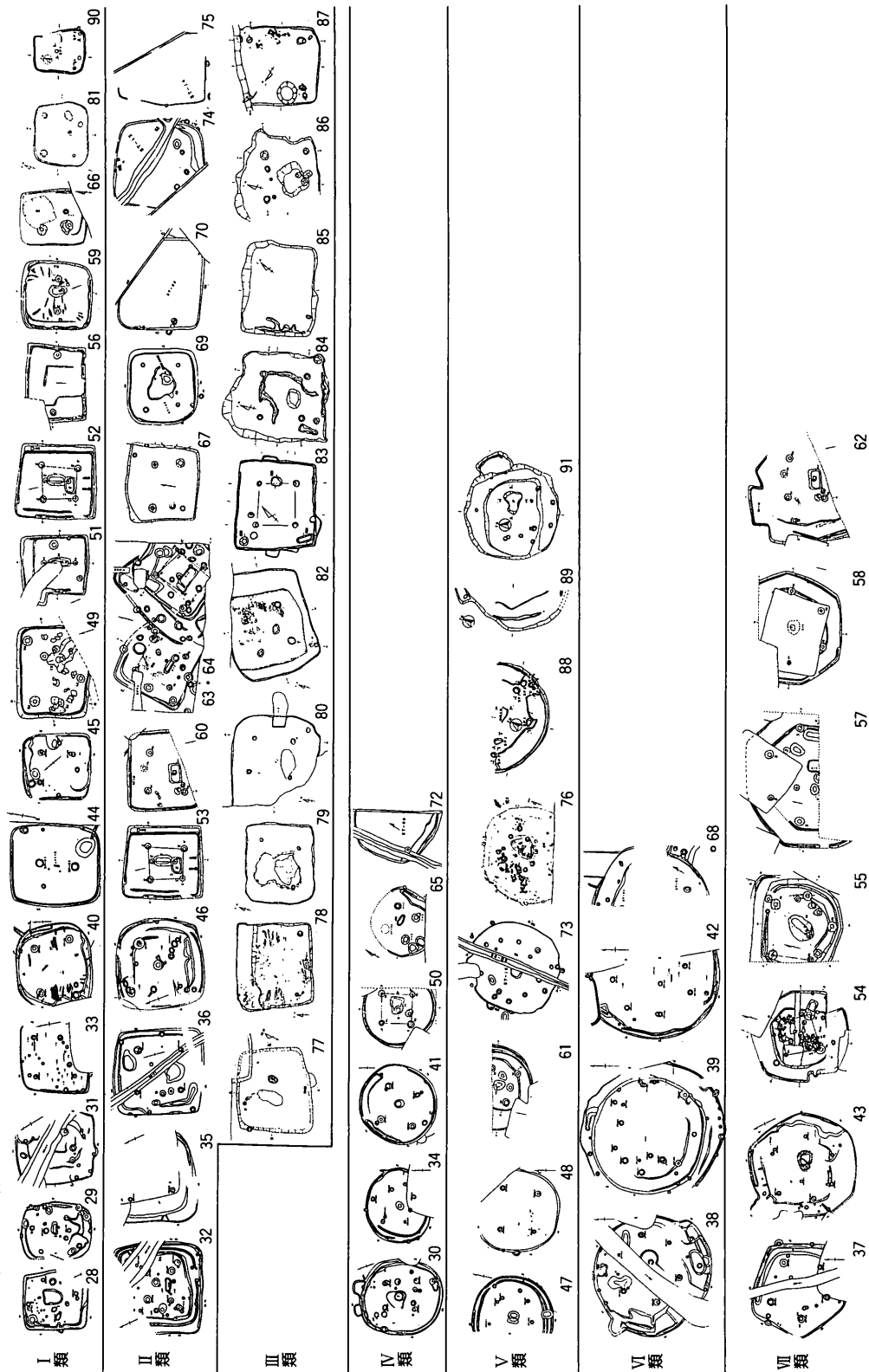
以上をまとめると、後期前葉段階では、各地域とも張出部を付設する中・大型円形住居の存在に大きな特徴を有し、一定の共通性、言い換えれば地域色を共有していた可能性が高い。しかし、後期中葉ないしは後半段階以降には、三豊地域と丸亀平野以東の両地域で住居平面プランや張出部の付設に若干の相違が生じ、小地域色が顕在化する可能性が指摘できる。

つまり、三豊地域では、終末期以降小型はⅠb類の長方形タイプのものが主流を占め、中型ではⅡa類の方形タイプが最も多く、長方形タイプはやや少なくなり、大型では方形タイプが多いが円形と多角形も少数混在し、平面プランや規模を問わず張出部の付設はみられなくなるといった様相に整理される。こうした各規模の住居形態に方形プランが卓越し、かつ張出部が欠落する様相を、方形基調（住居様式）と称しよう⁽¹³⁾。

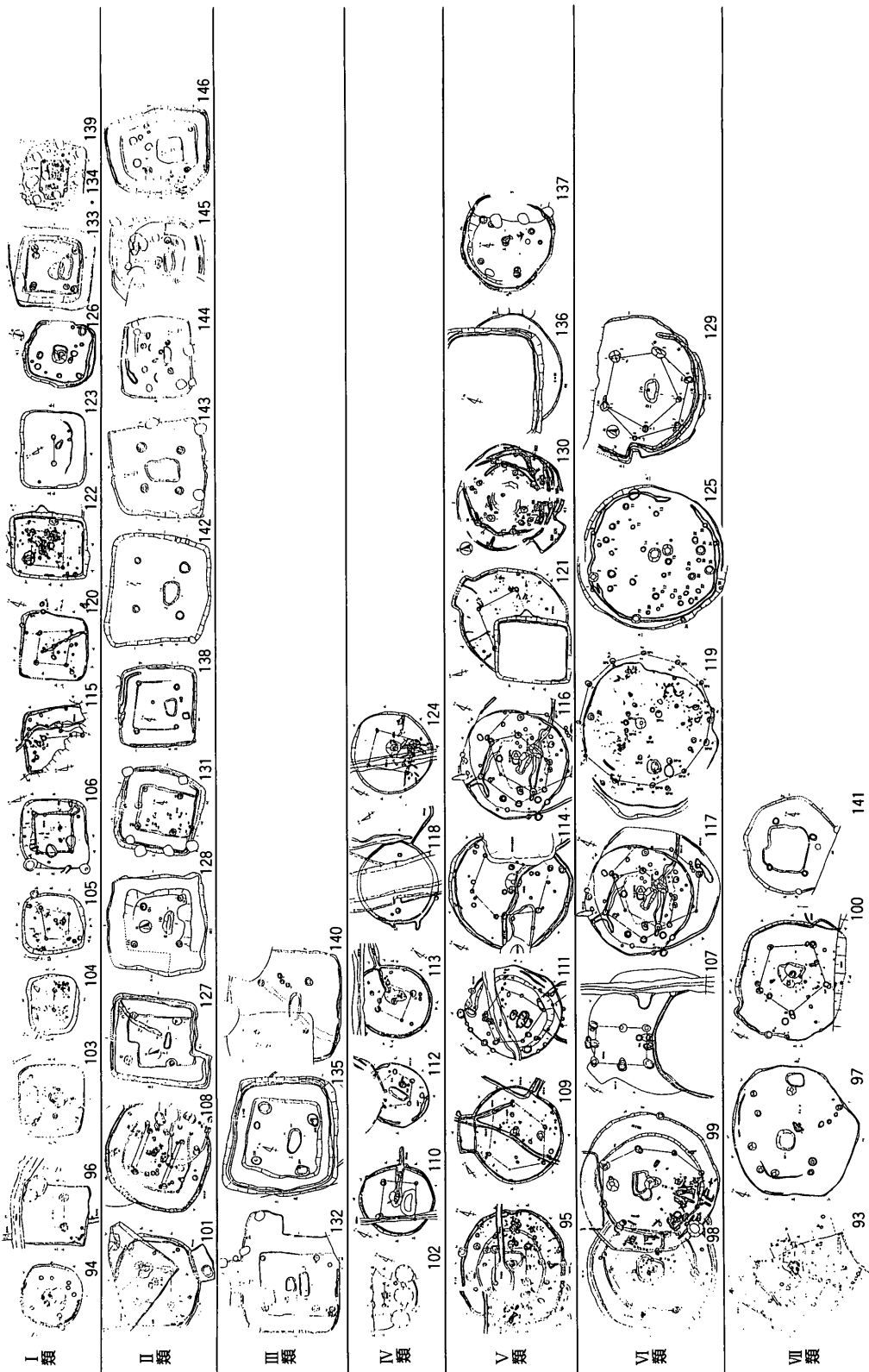
一方、終末期段階までの丸亀平野以東の地域では、小型住居では方形のものが半数近くを占め、中型住居でも方形のものが多数を占めるが、円形住居も約30%前後存在し、大型住居では円形が多数を占め、一定量の多角形が混在する。また張り出しを付設する住居が、



第284図 竪穴住居平面形態分類 1 (1/400、番号は一覧表と同じ)

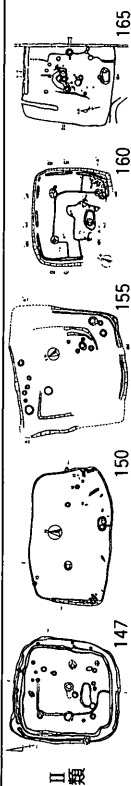
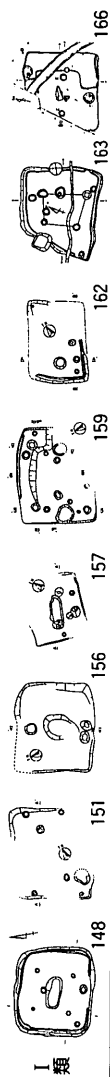


第285図 竪穴住居平面形態分類2 (1/400, 番号は一覧表と同じ)

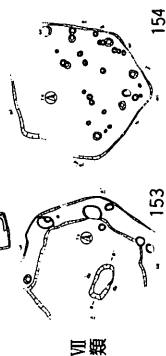
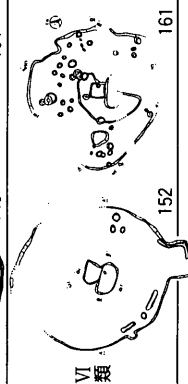
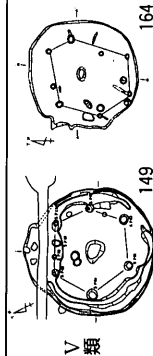


第286図 竪穴住居平面形態分類3 (1/400, 番号は一覧表と同じ)

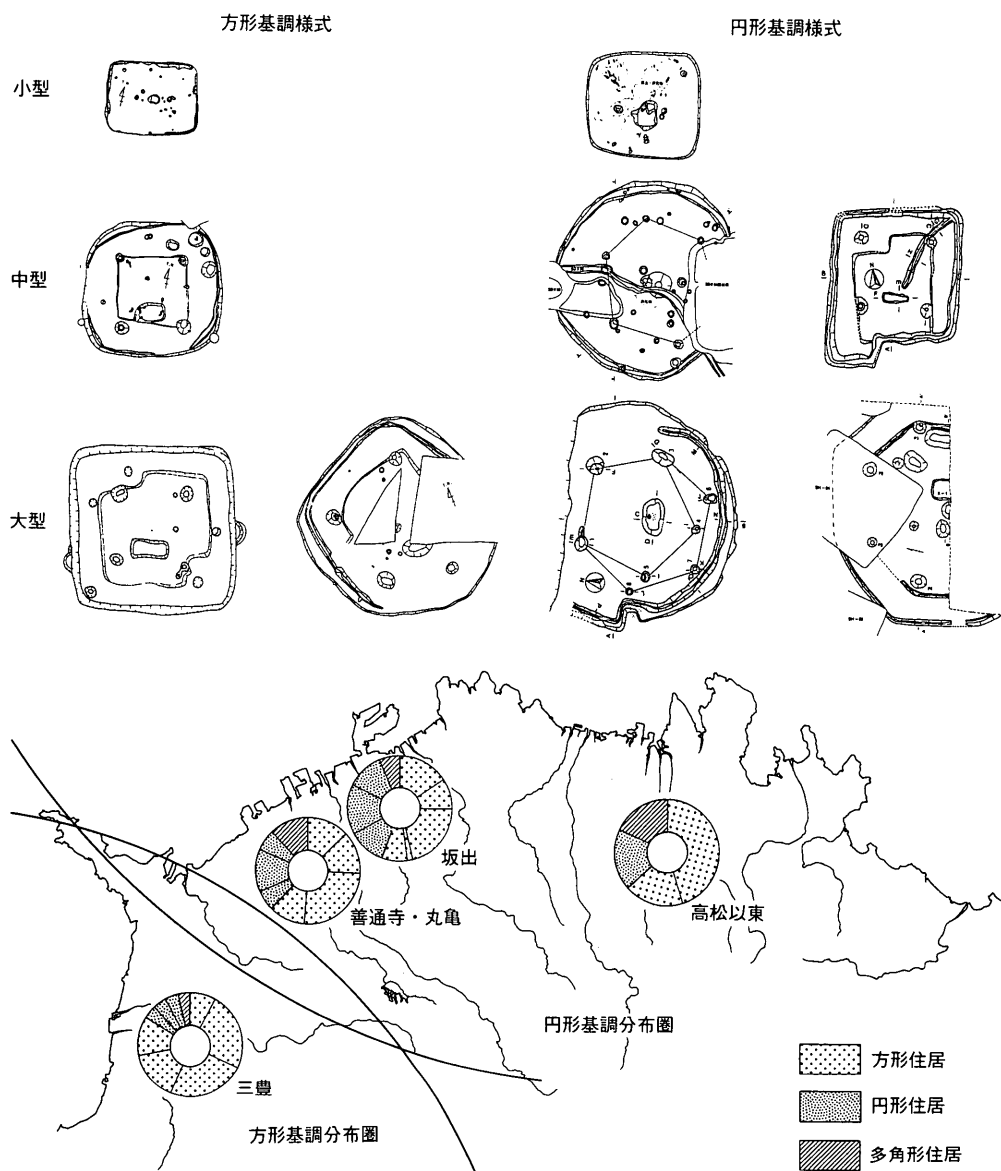
高松平野以東地域



IV類



第287図 竪穴住居平面形態分類4 (1/400, 番号は一覧表と同じ)



第288図 弥生時代後期後半から古墳時代前期の竪穴住居地域別分類

全住居数の30%近く（削平深度が著しいか全体を検出していない例を除外すれば、張り出しを付設する住居の比率はより高くなる）存在することも重要な要素である。こうした様相を同様に円形基調（住居様式）と称しよう。

上記のように、円形基調式と方形基調式は、住居平面形態のみならず付帯施設の有無によっても明確な相違を描出することが可能と考える。さらに、円形基調から方形基調への漸移的な変化は、各地域共通してみられるが、三豊地域では後期中葉から後半代に、丸亀

平野以東の各地域では古墳時代前期初頭頃に求められ、両地域でかなりの時間差を認めることができる。この点を重視したい。

終末期段階でのB類土器共有圏の範囲は、上記円形基調式の分布エリアとほぼ合致する可能性が高く、さらに古墳時代前期初頭段階での方形基調への転換は、B類土器の拡散現象の衰退期と概ね一致する。今少しやや憶測めいたことを付加すれば、三豊地域の後期中葉から後半段階での円形基調式からの離脱は、そうしたB類土器共有圏の集団からの離別と合致する可能性が高い。

上記した検討には、柱数やベッド状遺構の形状など、分類上の属性数を増やせば、より細かな地域色を抽出することも可能かも知れない。また、両地域の地域色を実証するには、さらに張出部の機能や用途、伝播経路や細かな出現時期、三豊地域での消滅過程の検討などが不可欠である。しかし、各地域の資料数の問題もあって、踏み込んだ検討をなすことは当面不可能であろう。ここでは、土器様式のエリアと住居形態のエリアが合致する可能性が高い点を指摘するに留めたい。上記地域における生活習慣やイデオロギーの共通性が、弥生時代後期後半段階には存在する点を確認しておきたい。

5. B類土器共有圏形成の背景

前項までの検討によって、B類土器という特殊な土器様式を取り上げ、その各地域への搬入形態は均質なものではなく、顕著な偏差が認められること。さらに、旧国内部においてさえ、偶発的な搬入を除いては同種土器は持ち込まれず、B類土器様式の受容を拒絶した地域と、独自の土器様式は保有しつつB類土器様式の一部もしくはその大半を受容した地域との2者が存在することが明らかとなった。そして後者によって括られる地域を、B類土器共有圏と呼称することを提案した。

また、竪穴住居平面形態とその規模の検討を行い、讃岐において、B類土器共有圏内部に、円形基調式と称した住居群が分布することを指摘した。そして、弥生時代後期中葉から後半段階には共有圏の外部に位置する三豊地域との間に、住居様式においても格差がみられる可能性を指摘した。

では、こうしたB類土器共有圏によって示される地域圏形成には、どのような背景が考察されるであろうか。土器及び住居様式を共有する地域的な結びつきは、どのような経緯によって生じたのであろうか。

B類土器共有圏内部での同種土器の出現頻度は、各遺跡での報告例を参照すれば、B類土器製作圏を除けば最大でも20～30%程度に収まる。この程度の搬入量であれば、B類土器製作圏からの一方的な土器供給体制を想定することは困難であり、おそらくは集団間の関係性の確認行為、社会関係を維持するためのアイテムとして土器の贈答が行われたことを反映するものと理解したい。共有圏内でのB類土器の在り方は、経済的な側面よりも社会性をより表出しているものと考えられる。

さて、共有圏内部でのB類土器の搬入形態を再度整理してみると、複数器種の搬入と精緻な模倣形態の製作、土器棺へのB類土器の採用と墳墓への供献といった点が挙げられる。さらに、住居形態においても、平面プランや張出部といった特殊な構造に、一定の共通性が認められた。こうした諸点は、少なくとも讃岐地域においては、共有圏内部の諸集団の日常生活の中に、共通した慣習や規範が醸成されていたことを物語る。そして、上記した土器の搬入形態は、既に都出比呂志氏が畿内周辺での弥生時代中期の土器資料の検討から設定された「通婚圏」の要件に概ね該当する（都出1989）。共通した慣習・規範の存在は、一定規模の集団の移住といった人的交流を助長させる余地を多分に認める（田崎1995）ものであり、「通婚圏」に代表される人的かつ物的交流の頻繁な交流圏といったものが、共有圏成立の具体相であった可能性が高い。

現在、B類土器共有圏として認識される地域は、善通寺地域以東の讃岐中・東部域と阿波東部域、さらに播磨西部の揖保川下流の一部地域であり、第289図に示される。弥生終末期以降これらの地域では、前方後円墳の一部に積石塚を採用し、墳墓の構築面で強い地域色を共有する。例えば、阿波東部域では萩原1号墓（菅原ほか1983）、奥谷2号墳（一山1983）、揖保川下流域では岩見北山積石塚4号墳（芝ほか1997）がある。また、積石塚ではないにしろ、後円部を丘陵下方に選地し、東西方位を優先する埋葬施設を有する讃岐地域との親縁性を認める前方後円墳（蔵本1995）の分布域とも合致する（例えば、播磨では吉島古墳・養久山1号墳・金剛山6号墳があり、阿波では宝幢寺1号墳・愛宕山古墳がある）。やや時期を異にするものの、極めて地域色が強く個性的な墳墓の分布と土器様式のその重複から、各地域間の上部構造の密接な関係を基盤とした、人や物資の移住・移動が生起したと考える。

東阿波型土器の拡散の背景に、吉野川水系を物流幹線とした非自給物資の流通網の存在を想定した菅原氏の説（菅原1992a）は、こうした地域圏の形成要因を考察する上で極めて魅力的である。稲持遺跡の蛇紋岩製勾玉、若杉山遺跡の朱、善通寺地域の流紋岩製砥石、



第289図 B類土器共有圏と前期積石塚前方後円墳の分布（1/2,000,000）

それに瀬戸内沿岸部の塩などの物資の流通網の統括主体を東阿波型土器保有集団に求め、「讃岐地域と連動しつつも、阿波地域としての独自性」を強調する。東阿波型土器を核とする吉野川下流域の集団の位置付けにはやや異論があるが、菅原氏が想定するように、B類土器共有圏内部での上掲物資の分布から、その流通網の形成を契機とした、一定程度に成熟した広域的な分業生産体制が確立されていたことは間違いない。つまり、これら地域が、互恵的な非自給物資の交易によって強固に連結されており、微妙なパワーバランスの上に極めて個性的な土器様式を創出していった可能性が想定される。

前記した弥生時代後期中葉ないし後半段階における、三豊地域と丸亀平野以東地域との乖離は、こうした流通網の変化から推測することも可能であろう。よく説かれているように、当該期石器の消滅とそれに代わる鉄製利器の普及が急速に進展していたことは間違いない（森岡1998）。例えば、石器の特定器種における素材の寡占状況（石鏃や打製石庖丁におけるサヌカイトや磨製石斧各種における片岩系統の石材など）は、安定した石材供給体制の充実と、各地域単位での石器製作の限定を背景とした、弥生時代を通じて連綿と受け継がれてきた広域のかつ系統的に整備された互恵を原理とする物資流通網、つまり「石器の流通システム」（禰宜田1998）の存在を想起させる。しかし、後期中葉段階には決定的となる鉄素材の普及によって、そうした既存の流通網は寸断され、おそらくはきわめて強い緊張関係を生起したと考えられる。こうした緊張関係への対応の如何によって、諸集団間の結合関係は再編され、地域間のイデオロギー的側面での紐帯も徐々に変質し、やが

ては政治的な空間領域の変化をも招来したものとする。

非自給物資、特に鉄素材の交易を通して各集団間に頻繁な接触を生じ、その接触の中から、物資や人間の移動・移住が生起した。しかしそれは、等質的で単調なものではなく、B類土器の搬入偏差にみられるごとく拠点的で格差をともなったものであった。その物流システムの中核の一つに、B類土器製作圏を位置付ける。やや時期は遡るが、B類土器製作圏に位置する上天神遺跡では、多量の朱精製土器と共に、畿内から西部瀬戸内の各地域の土器の搬入が確認されており（大久保1995）、非自給物資の管理と共に海上交通路の結節点に位置した後の貿易港的な流通のターミナルとして位置付けることが可能であろう。そしてこのような地域では、集団のアイデンティティを強調するため、地域集団を象徴する特色ある土器様式が成立すると考えられている（佐々木1997）。B類土器の成立する素地、さらには積石塚古墳に代表される政治的な空間領域の形成は、弥生後期初頭段階には既に準備されていたのである。

註1. 例えば、下川津V式期に後続する郡家原遺跡SD158では、小形のB類高坏1点が報告されているのみである（山下ほか1993）。おそらくほぼ同時期に位置付けられる道下遺跡SD09出土資料には、B類土器は報告されていない（宮崎1991）。また、下川津VI式期にやや後出するが、下川津遺跡SHI32や彼ノ宗遺跡ST15出土資料でも、同様にB類土器の報告は皆無である。

註2. 墳墓へのB類土器供献例として、寒川町奥10号墓（大久保1993）、綾歌町石塚山2号墳（國木1993）、徳島県萩原1号墓（菅原ほか1983）等がある。

註3. しかし、本地域の土器様式において東海系の影響は微弱ながらも認められる。中間西井坪遺跡出土の内湾脚部例については前節において指摘したが、空港跡地遺跡前方後方形周溝墓ST05出土の直口壺（真下ほか1993）についても、在地系譜の土器系列では理解できず、やはり東海系の影響が想定され、廻間7～8式期の壺D1の系譜上（赤塚1990）に位置付けられると考える。さらに、三条番ノ原遺跡包含層出土の内湾した口縁部を有する長頸壺（251）についても、東海系の影響を想定すべきであろう。

註4. 稲木遺跡（西岡ほか1989）出土のB類土器として、下記のものがある（数字は、報告書中の遺物番号）。

94-3, 115-115・128, 122-63, 124-128・135, 125-156, 130-59, 134-132・133・145, 144-43, 153-42, 195-3, 230-20, 235-131・132・135, 245-12, 249-99, 250-102・122

註5. 土器棺の例として、寒川町森広遺跡8号土器棺棺身（山本一ほか1997）、兵庫県龍野市新宮東山古墳群3号土器棺（岸本1996）等がある。また墳墓への供献土器については、註1を参照。

註6. このようなB類土器の模倣形態に、下記のような例がある（数字は、報告書中の遺物番号）。

稲木遺跡 99-1, 112-38, 113-68, 115-112, 121-48, 134-131, 148-29, 153-47, 156-103・106, 232-67・69, 238-188, 248-71, 250-111

郡家原遺跡 206・292

川津中塚遺跡 686・875

川津一ノ又遺跡Ⅲ区 472・498・505・540・700・800・805・1491・1546

川津一ノ又遺跡Ⅳ区 1804・1891

前田東・中村遺跡 C176・E27・F95・F275・G258・G275・G502

註7. B類土器として、下記のものがある（数字は、報告書中の遺物番号）。

郡家原遺跡 18, 21, 92, 117～118, 175, 176, 206, 210, 264, 266, 293～295, 375

龍川五条遺跡 1766

註8. 例えば、川津一ノ又遺跡（山下1997）では当該時期の土器資料約1,000点に対し、同種壺6点、支脚1点が、下川津遺跡（藤好ほか1990）では同様に約2,000点の資料（後期中葉以降の資料含む）に対し、同種壺16点、支脚8点が報告されている。いずれも、総量に対する占有率は1%程度と少ないが、在地で製作されている可能性のある土器を含むことから、分布圏に含めておく。

註9. B類土器は各遺跡より出土しており、量的に膨大な資料の蓄積をみる。ここでその全てを提示することは困難であり、代表的なもののみ例示しておく。（数字は、報告書中の遺物番号）

広口壺A 川津二代取193, 川津一ノ又Ⅲ区1596?

広口壺B 川津一ノ又Ⅲ区1061・1561,

細頸壺 川津元結木311・313, 川津一ノ又Ⅲ区924・993, 川津一ノ又Ⅳ区507

複合口縁壺 川津一ノ又Ⅲ区1684

甕A 下川津Ⅰ81-21（第1分冊第81図21の土器の略、以下同じ）、川津一ノ又Ⅲ区1697

甕B 下川津Ⅰ88-4, 川津一ノ又Ⅲ区581・1574, 川津一ノ又Ⅳ区1631, 川津一ノ又 246・248

甕C 下川津Ⅰ84-4, 川津下樋484, 川津一ノ又Ⅲ区1074・1240・1577

高坏A 下川津Ⅰ124-1, 川津一ノ又Ⅲ区841・1588, 川津一ノ又Ⅳ区354

高坏B 下川津Ⅰ90-17・Ⅱ95-3, 川津一ノ又Ⅲ区1299, 川津一ノ又Ⅳ区352・512

中形鉢 川津一ノ又Ⅲ区1581

小形丸底土器 下川津Ⅱ110-21, 川津元結木51, 川津一ノ又Ⅳ区361・582

台付小形丸底土器 下川津Ⅱ48-5, 川津元結木208・209, 川津一ノ又Ⅲ区500・794, 川津一ノ又Ⅳ区516・1588

註10. 前田東・中村遺跡からは、百個体に近い数量のB類土器が報告されている。その内、E～G地区出土の代表的なものを抽出して、以下例示しておく。（数字は、報告書中の遺物番号）

410-69, 413-115, 527-783, 562-76, 563-82, 564-96, 566-116, 580-271・274, 585-316・317, 647-87, 671-269, 672-277, 673-279, 681-323・325・328, 698-524, 735-781

註11. B類土器として、下記のものが報告されている。（数字は、報告書中の遺物番号）

148, 183, 213, 215, 268～270, 285, 400, 458, 477, 520, 529, 544, 557

註12. 一ノ又遺跡出土の把手付広片口皿の胎土は、角閃石や黒雲母粒をほとんど認めず、いわゆる高松平野中枢部の「胎土1類」土器のそれとは明らかに異なる。つまり、遺跡周辺を含めた高松平野中枢以外の地域で製作された可能性が高いと考える。しかし、このことは必ずしも本地域と高松平野中枢域との関係が希薄であったことを示す根拠とはならない。一ノ又遺跡でも上天神遺跡同様、朱の使用に鉢が多用されており、把手付広片口皿の共有の点からも、習俗的な部分での共通した規範の存在が窺える。

なお、報告者は一ノ又遺跡出土の片口皿を後期前半代に位置付ける（古野1998）。しかし、供伴する資料はいずれも弥生終末期に下り、また他の朱付着資料のほぼすべてが終末期に位置付けられることからすれば、片口皿の時期を終末期に下らせることに躊躇する必要はないだろう。

註13. 時期的に限定された僅か2遺跡の資料をもって、1類型を設定することには大きな躊躇を伴う。ここで類型設定する根拠は、土器様相や後の古墳の分布ともうまく整合性をもって理解できる見通しが得られるからである。今後資料の増加に伴って筆者の理解に変更の余地は認めるが、現状での認識には誤りないものとする。

	遺跡名	遺構名	平面形	張り出し	柱数	規模	形態分類	時期	文献	備考
1	一の谷遺跡群	S B 301	円形	—	4	B	Ⅳ類	古・前期初	西岡ほか1990	
2		S B 302	方形	—	4	C	Ⅱ a 類	弥・終末期		
3		S B 304	長方形？	—	2	B	Ⅰ b 類	？		削平顕著
4		S B 305	方形？	—	7？	E？	Ⅲ a 類	弥・終末期？		削平顕著
5		S B 306	円形	3	7	C	V類	弥・後期前葉		
6		S B 307	方形	—	4	C	Ⅱ a 類	弥・終末期		
7		S B 308	方形	—	4	D	Ⅱ a 類	古・前期初		
8		S B 309	方形	—	4	D	Ⅲ a 類	弥・終末期		削平顕著
9		S B 310	方形	—	4	C	Ⅱ a 類	古・前期初		
10		S B 311	長方形	—	2	B	Ⅰ b 類	弥・終末期？		
11		S B 312	五角形？	？	5	E～F	Ⅶ類	弥・終末～古・前期初		削平顕著
12		S B 313	六角形？	無	5？		Ⅶ類	古・前期初		
13		S B 314	長方形	—	2？	A	Ⅰ b 類	古・前期初？		
14		S B 315	長方形	—	？	A	Ⅰ b 類	弥・終末期		
15		S B 316	方形	—	？	C？	Ⅱ a 類	弥・終末期		
16		S B 317	方形	—	4	D	Ⅱ a 類	弥・終末期		
17		S B 318	長方形	—	4	B	Ⅰ b 類	古・前期初		
18		S B 319	方形	—	？	B	Ⅰ a 類	？		削平顕著
19		S B 320	長方形	—	4	C	Ⅱ b 類	古・前期初		
20		S B 321	長方形？	？	4	C	Ⅱ b 類	弥・終末期？		削平顕著
21		S B 322	長方形	—	2	A	Ⅰ b 類	？		管玉
22		S B 323	長方形	—	2？	C	Ⅱ b 類	古・前期初		砥石
23		S B 324	円形？	—	4	D	V類	弥・終末期		
24		S B 325	円形？	—	4	E	Ⅵ類	古・前期初		砥石
25		S B 327	長方形	—	4？	C	Ⅱ b 類	弥・終末期？		
26		S B 328	方形	—	4？	B	Ⅰ a 類	古・前期初		
27	南草木遺跡	住居跡	方形	—	4		Ⅲ a 類	弥・終末期	秋山ほか1980	
28	彼ノ宗遺跡	S T 01	長方形	？	2？	B	Ⅰ b 類	弥・終末期	笹川1985	
29		S T 02	長方形	？	2	B	Ⅰ b 類	弥・後期後半～		
30		S T 03	長円形？	2	4	B	Ⅳ類？	弥・後期後半？		
31		S T 06	長方形	？	2？	B	Ⅰ b 類	弥・終末期？		
32		S T 09	方形	？	4	C	Ⅱ a 類	弥・終末期		鏡片
33		S T 12	方形	？	4	B	Ⅰ a 類	弥・終末期		玉類・攪乱顕著
34		S T 13	円形	？	4？	B	Ⅳ類	弥・後期前半		玉類
35		S T 14	方形	？	4？	C	Ⅱ a 類	弥・終末期？		攪乱顕著
36		S T 15	方形	—	4	C	Ⅱ a 類	古・前期初		
37		S T 16	五角形？	？	5？	C	Ⅶ類	弥・終末期		
38		S T 18	円形	1	6	E	Ⅵ類	弥・終末期？		
39		S T 20	円形	—	4？	F	Ⅵ類	弥・終末期		ガラス玉・鉄器
40		S T 21	方形	？	4	B	Ⅰ a 類	弥・終末期		
41		S T 23	円形	—	4	B	Ⅳ類	弥・後期後半		
42		S T 24	円形？	？	？	F	Ⅵ類	弥・終末期		玉類・銅鏃・鉄器
43		S T 26	六角形？	1	6？	D	Ⅶ類	弥・終末期		玉類
44		S T 27	方形	—	2	B	Ⅰ a 類	弥・終末期		ガラス玉
45		S T 31	方形	—	4？	B	Ⅰ a 類	弥・終末期		
46		S T 33	方形	—	4	C	Ⅱ a 類	弥・終末期		
47		S T 34	円形	？	？	C	V類	弥・後期中葉？		
48		S T 37	円形？	？	4	C	V類	弥・終末期		西部瀬戸内系
49	旧練兵場遺跡 (保育所地点)	S H 01	長方形	—	2	A	Ⅰ b 類	弥・後期後半～	森下1994	
50		S H 02	円形	？	4	B	Ⅳ類	弥・後期前葉		
51		S H 04	長方形	1	2	B	Ⅰ b 類	弥・終末期		
52		S H 06	長方形	—	2	B	Ⅰ b 類			
53		S H 07	多角形	1	4	D	Ⅶ類	弥・終末期		
54		S H 09	五角形	？	5	C	Ⅶ類	弥・終末期		玉類

第24表 讃岐地域の竪穴住居集成表 1

	遺跡名	遺構名	平面形	張り出し	柱数	規模	形態分類	時期	文献	備考
55		S H 10	長方形	—	2	B	I b 類	古・前期初		
56		S H 11	八角形	?	8	F	Ⅶ類	弥・後期後半～		
57		S H 12	六角形	?	6	D	Ⅶ類	弥・終末期		
58		S H 13	方形	—	2	B	I a 類	弥・終末期		
59		S H 17	方形	?	4	C	Ⅱ a 類	弥・終末期		
60		S H 18	円	?	4 ?	C	V 類 ?	弥・後期後半		
61		S H 19	五角形 ?	1 以上	5 ?	C	Ⅶ類	弥・後期後半～		
62	(看護学校教場等地点)	S H 08	方形	?	4	C	Ⅱ a 類	弥・終末期	森下 1994	
63		S H 10	方形	?	4	C	Ⅱ a 類	弥・終末期		
64	(品質管理実験棟地点)	S H 01	円形 ?	?	4	B	Ⅳ類 ?	弥・後期後半 ?	森下英 1995	
65		S H 03	長方形	?	2	B	I b 類	弥・後期後半		
66	仲村廃寺	S H 31	方形	—	4	C ?	Ⅱ a 類 ?	弥・終末期	笹川 1989	
67	九頭神遺跡	S T 01	円形 ?	?	?	E ?	Ⅵ類	弥・後期後半	笹川 1988	
68		S T 03	方形	—	4	B	Ⅱ a 類	弥・終末期	鉄鍬・銅製品	
69		S T 06	方形	—	?	C	Ⅱ a 類	弥・終末期		
70		S T 08	方形	?	?	B ?	I a 類 ?	弥・後期前葉		
71		S T 09	円形 ?	?	?	B	Ⅳ類 ?	弥・終末期		
72		S T 10	円形	1 ?	10 ?	D ?	V 類	弥・終末期 ?		
73		S T 12	方形	—	4 ?	C	Ⅱ a 類	弥・後期後半～		
74		S T 14	長方形	?	?	C	Ⅱ b 類	弥・後期後半～		
75	稲木遺跡	S H 01	円形 ?	?	?	C	V 類	弥・終末期	善通寺市ほか 1987	
76		S H 02	方形	—	?	C	Ⅱ a 類	弥・終末期		
77		S B 01	方形	—	4	C	Ⅱ a 類	弥・終末期	西岡ほか 1989	
78		S B 02	長方形	—	4	C	Ⅱ b 類	弥・終末期	刀子 ?	
79		S B 03	長方形	?	4	C ?	Ⅱ b 類	弥・終末期	刀子 ?	
80		S B 04	方形	—	4	B	I a 類	弥・終末期		
81		S B 05	長方形	?	4	D	Ⅱ b 類	弥・終末期		ヤリガンナ
82	龍川五条遺跡	S H 01	方形	3 ?	?	C	Ⅱ a 類	古・前期後半	宮崎 1996	玉
83	三条番ノ原遺跡	S H 01	長方形	1 ?	4	D	Ⅱ b 類	弥・後期後半～	片桐 1992	
84		S H 02	長方形	—	?	C	Ⅱ b 類	弥・終末期		
85		S H 03	長方形 ?	?	4 ?	C ?	Ⅱ b 類 ?	弥・終末期		
86		S H 04	方形	—	4	C	Ⅱ a 類	弥・終末期		
87	郡家原遺跡	S H 01	円形	?	?	D	V 類	弥・後期後半	山下ほか 1993	
88		S H 02	円形	1 以上	?	D	V 類	弥・後期後半		
89		S H 03	方形	—	?	A	I a 類	弥・終末期		
90		S H 04	円形 ?	1	?	C	V 類	弥・終末期		
91		S H 06	方形	—	?	B	I a 類	弥・終末期 ?		
92	下川津遺跡	S H Ⅱ 01	多角形 ?	1 以上	6 ?	F	Ⅶ類	弥・後期中葉	藤好ほか 1990	
93		S H Ⅱ 02	方形	—	4	B	I a 類	弥・終末期		
94		S H Ⅱ 03	円形 ?	—	4	D	V 類	弥・後期後半		
95		S H Ⅱ 04	長方形	?	4 ?	B	I b 類	古・前期後半		
96		S H Ⅱ 05	多角形 ?	—	4 ?	F	Ⅶ類	弥・後期後半～		
97		S H Ⅱ 06	円形 ?	1 以上	6	F	Ⅵ類	弥・終末期 ?		
98		S H Ⅱ 07	円形 ?	—	6	F	Ⅵ類	弥・終末期		
99		S H Ⅱ 08	多角形 ?	2	5	E	Ⅶ類	弥・終末期		
100		S H Ⅱ 09	方形	1	4	C	Ⅱ a 類	弥・終末期		銅鏡
101		S H Ⅱ 11	円形 ?	?	2	B	Ⅳ類	弥・終末期		
102		S H Ⅱ 12	方形	—	2	B	I a 類	弥・後期後半～		
103		S H Ⅱ 13	長方形	—	2	B	I b 類	弥・後期後半～		
104		S H Ⅱ 14	方形	—	4	B	I a 類	弥・終末期		
105		S H Ⅱ 15	方形	—	4	B	I a 類	弥・終末期 ?		
106		S H Ⅱ 16	円形	1 以上	?	F	Ⅵ類	弥・後期後半～		
107		S H Ⅱ 17	方形	—	4	D	Ⅱ a 類	弥・終末期		
108		S H Ⅱ 18	円形	1	6	C	V 類	弥・終末期		

第25表 讃岐地域の竪穴住居集成表 2

	遺跡名	遺構名	平面形	張り出し	柱数	規模	形態分類	時期	文献	備考
109		S H Ⅱ 19	円形	—	4	B	Ⅳ類	弥・終末期?		
110		S H Ⅱ 20	円形	—	6	C	V類	弥・終末期～		
111		S H Ⅱ 21	円形	—	5	B	Ⅳ類	弥・終末期		
112		S H Ⅱ 22	円形	—	4	B	Ⅳ類	弥・後期後半?		
113		S H Ⅱ 23	円形?	?	6?	C	V類	古・前期初?		
114		S H Ⅱ 24	長方形?	?	2?	B	I b 類	弥・後期後半～		
115		S H Ⅱ 25	円形	—	6	D	V類	弥・終末期		
116		S H Ⅱ 26	円形?	?	7	E	Ⅵ類	弥・後期後半?		
117		S H Ⅱ 28	円形	—	?	B	Ⅳ類	弥・終末期		
118		S H Ⅱ 29	円形?	?	?	F	Ⅵ類	弥・後期後半～		
119		S H Ⅲ 30	方形	—	4	B	I a 類	弥・終末期		
120		S H Ⅲ 31	円形	1 以上	4?	D	V類	弥・後期後半		
121		S H Ⅲ 32	長方形	—	4	B	I b 類	古・前期初		
122		S H Ⅲ 33	長方形	—	2	B	I b 類	古・前期初?		
123		S H Ⅲ 34	円形	—	4	B	Ⅳ類	弥・後期後半		
124	川津中塚遺跡	S H Ⅲ 01	円形	—	7?	大型	Ⅵ類	弥・後期後半	西岡他1994	玉・鉄鏃
125		S H Ⅲ 02	長方形	—	4?	小型	I b 類	弥・後期後半?		銅鏡
126	川津一ノ又遺跡	S H 02	方形	1	4	C	Ⅱ a 類	弥・終末期	山下1997	
127		S H 04	方形	—	4	D	Ⅱ a 類	弥・終末期		
128		S H 05	円形	1	5	F	Ⅵ類	弥・終末期		
129		S H 08	円形	1	6	D	V類	弥・終末期		
130		S H 08	円形	1	6	D	V類	弥・終末期		
131		S H 07	方形	2	4	E	Ⅲ a 類	弥・終末期		
132		S H 28	方形	—	4	B	I a 類	弥・後期後半		
133		S H 08	方形	—	4	B	I a 類	弥・終末期		
134		S H 09	方形	—	4	E	Ⅲ a 類	弥・終末期		
135		S H 10	円形	?	?	D	V類	弥・後期後半		
136		S H 13	円形	?	4?	C	V類	弥・後期前半?		
137		S H 18	方形	—	4	C	Ⅱ a 類	弥・後期後半		
138		S H 20	方形	—	4	B	I a 類	弥・終末期		
139		S H 22	方形	?	4	E	Ⅲ a 類	弥・終末期		
140		S H 23	多角形?	?	4	C	Ⅶ類	弥・終末期		
141		S H 24	方形	—	4	D	Ⅱ a 類	弥・終末期		
142		S H 25	方形	—	4	D	Ⅱ a 類	弥・終末期		
143		S H 26	方形	—	4	C	Ⅱ a 類	弥・終末期		
144		S H 29	方形	?	4	D	Ⅱ a 類	弥・終末期		
145		S H 33	長方形	1?	4?	D	Ⅱ b 類	弥・終末期		
146	西打遺跡	S H 01	方形	—	4	C	Ⅱ a 類	弥・終末期?	北山ほか1998	
147		S H 02	長方形	—	4	B	I b 類	弥・終末期?		
148	上天神遺跡	S H 01	円形	1	6	D	V類	弥・後期初	大久保ほか1995	玉
149	太田下・須川遺跡	S H 01	長方形	—	2	C	Ⅱ b 類	弥・後期初	北山ほか1995	削平顕著
150	空港跡地遺跡	S H c 01	方形	?	?	B	I a 類	弥・後期後半～	西岡1996	
151		S H c 02	方形?	?	?			弥・後期中葉～		
152		S H c 03	方形?	?	?			弥・終末期		
153		S H c 04	円形	1	?	C	V類	弥・終末期		
154		S H c 06	六角形?	?	?	E	Ⅶ類	弥・終末期		
155		S H c 07	六角形?	?	?	D?	Ⅶ類	弥・終末期		
156		S H c 11	長方形	?	4?	D	Ⅱ b 類	弥・終末期		
157		S H c 12	方形	?	2	A	I a 類	弥・後期後半～		
158		S H c 17	方形	?	2	A	I a 類	?		
159	前田東・中村遺跡	E 区 S H 01	方形?	—	4?	B	I a 類?	弥・終末期	森ほか1995	
160		F 区 S H 01	円形	?	6?	c	V類	弥・後期初頭		
161	鴨部南谷遺跡	S H 8801	長方形?	?	2	C	Ⅱ b 類	古・前期後半	國木1990	
162		S H 8902	方形?	?	2	B	I a 類?	弥・後期後半～		

第26表 讃岐地域の竪穴住居集成表 3